

41731

教科書文庫

4

810

41-1931

200030  
2040

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

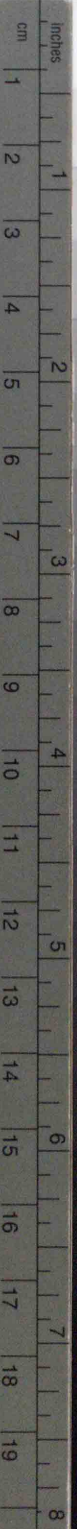


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



見本  
中華書局  
編輯部

375.9  
Y019  
資料室

# 中國文教科書

## 中學

三卷



東京

光風館藏版





資料室

文部省檢定濟

昭和三十六年十二月二十二日 中國語文教科用

吉田彌平編

中國文教科書

卷三

東京 光風館藏版

3759

Y019



中國文教科書卷三

目次

一	春の魂	幸田露伴	一
二	潮の岬	杉村楚人冠	五
三	紅椿	三木露風	九
四	峠の茶屋	夏目漱石	二
五	二つの聲	土岐善麿	六
六	本多重次	新井白石	三
七	松坂の一夜	佐佐木信綱	三

目次

一





八	歌話	中邨秋香	三
	あがたの宿		三
	とりみ坂		三
	焼野の原		四
九	蒲の花がたみ	瀧澤馬琴	四
一〇	トーチー	鈴木文史朗	五
一一	螢	横山桐郎	六
一二	札幌農園	菊池幽芳	七
一三	槍ヶ嶽へ	芥川龍之介	八
一四	九十九里濱	徳富健次郎	六
一五	金の鉤	北原白秋	一〇五

	渡り鳥		一〇五
	新月		一〇六
一六	名將の文事	芳賀矢一	一〇九
一七	豊臣太閤	三上參次	一一五
一八	進學	室鳩巢	一二五
一九	鼠	吉村冬彦	一二九
二〇	雷	薄田泣菫	一三五
二一	霧島登山	吉田絃二郎	一四〇
二二	烏賊釣舟	相馬御風	一四九
二三	東郷元帥の印象	和田英作	一五五
二四	み民われ		一六一



二五 厨子王……………森 鷗 外 一三

二六 水川清話……………勝 海 舟 一七

二七 南洲遺訓……………西 郷 南 洲 一八

目次終

中國文教科書卷三

一 春の魂

幸田露伴

幸田露伴  
名は成行  
文學者  
文學博士  
慶應三年(一八五七)  
江戸生

櫻は春の魂なり。  
櫻は邦の匂なり。

櫻はたゞ一本咲けるもよし。深山の岩陰などに何知らぬ  
さまして咲ける、或は磯山の茂れる雑木の間などに、ちらり  
と紛れぬ色を見せたる、あはれも淺からず思はる。  
櫻は幾本となく茂り合ひて咲けるもよし。狭き路を蔽ひ



て、右より左より枝をさしかはし、花瓣をおしあひて咲ける、或は遠山長溪、雲と連なり霞と蒸せるを打見たる、皆めでたし。牡丹などはいと好き花なれど、遠く眺め廣く觀るべきものにはあらず。其の趣甚だ違へり。

櫻は仰ぎて瞻るもよく、俯して瞰るもよし。餘の花は、仰ぎて瞻るに宜しきは、俯して瞰るに悪しく、俯して瞰るに悪しからぬは、仰ぎて瞻るにをかしからざるが多し。花の徳すぐれたりと言はん。

水に臨める櫻、花の上漕ぐ風情、ことにおもしろし。梅は老いて水に肘つくがよろしく、櫻は嫩くて花うなづかんとするがうるはし。池にも流水にもそれ〴〵佳趣あれど、流水

緋櫻

櫻の一種

瓣が多く花が小

さい

蕾は紅いが咲け

ば淡くなる

牡丹櫻

山櫻の變種

八重櫻

重瓣で花が大き

彼岸櫻

櫻の一種

他の櫻より早く

咲く

花は淡紅色の小

きな五瓣

に臨める、特に佳なり。大江に花の一吹雪亂るゝなど、誰かはこれををかしからずと言はん。藤の花、山吹の花も、水にはうつりよろしけれど、櫻の趣は更に高し。

緋櫻牡丹櫻、其の他の千瓣の櫻も皆悪しからず。廣き庭には、一樹二樹はさる美しき樹の有らんことも望ましかるべし。艶に過ぎ俗に近しとて咎めんは、一むき過ぎたる心なるべし。

彼岸櫻は淡くして早く咲くにめでたく、遅櫻は粧を凝して遅く咲くが嬉し。

梅は花かじけ萎みて終りがちなるが心飽かず。散りぎはの美しきは櫻なるべし。



蜘蛛のいの花びら、たゞ櫻のみ畫とするに堪へ、蛇の目の傘に花の雫を絞る、たゞ櫻のみ詩を成すに堪へん。他の花は及ばず。

近くも、遠くも、多きも、少なきも、雨にも、晴にも、朝にも、夜にも、晝にも、風にも、曇にも、水邊にも、山路にも、市にも、野にも、谷にも、磯にも、狭きにも、廣きにも、茶にも、酒にも、往くとして可ならざるなき、これ櫻の徳なり。他の花も皆一ふしありて佳ならずるに非ず。たゞ其の徳に於ては櫻に譲ること多し。櫻、櫻。櫻は春の魂なりとや言はん、邦の匂なりとや言はん。

（洗心廣録）

潮の岬

紀伊の南端の岬

杉村楚人冠

名は廣太郎

新聞記者

明治五年和歌山

生

## 二 潮の岬

杉村楚人冠

とかくして潮の岬の端へ出た。なだらかな高低のついた一面の芝生が見る目遙かに打續いて、其の間に薊蒲公英が咲いてゐる。脊の低い磯馴松がほつりくと處々に立つてゐて、それに繋いだ牛の姿が如何にも春らしい。村の少女子が遠くの芝生で鬼事でもしてゐるのか、陽氣な笑ひ聲が時をり聞える。右の方には燈臺の白い壁が巍然として空中に聳え、左には無線電信局と海軍の望樓とが、さながら崖から落ちかゝるやうな處に立つてゐる。崖の下はと見ると、幾千年の波に洗はれて、山骨あらはになつた巖が幾重となく並んで、これに太平洋の大波が、どうくと寄せては

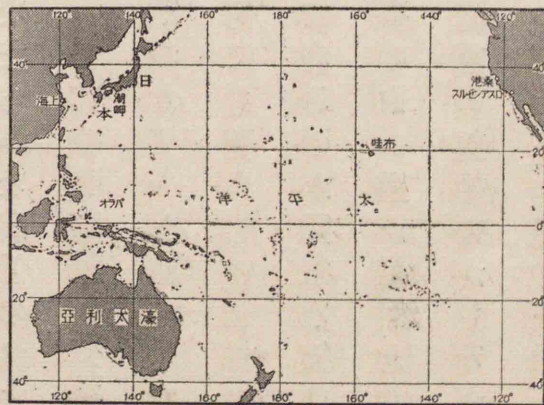
海軍の望樓

今はない



Los Angeles  
 スロス、アンゼルス  
 California  
 カリフォルニア  
 New Guinea  
 ニューギニー

返し、寄せては返ししてゐる。  
 余等は今や日本の本土の最南端の一角に立つてゐるのだ。  
 打開けた太平洋の海面、煙波縹  
 紗として、其の果何處としも覺  
 えぬ。地圖を按ずるに、此處か  
 ら正南は丁度蘭領印度のニ  
 ーギニーを隔てて濠太利亞の  
 大陸に相對し、東は遙かに太平  
 洋の千波萬波を越えて、北亞米  
 利加はカリフォルニア州のロ  
 ス、アンゼルスまで、間を遮るものもない。



太平洋を心中に

日本の南端の一



岬の潮

角といふと、如何にも世の中  
 から棄てられた處のやうに  
 聞えるが、其の實、此の一角が  
 即ち日本と世界との接觸す  
 る處なのだから面白い。  
 まづ此の岬角に立つてゐる  
 白色不動の燈臺は、世界の船  
 舶に其の針路を示してゐる。  
 此處の無線電信局は、日々夜  
 夜に世界と相語つてゐる。  
 ことに海軍の望樓に至つて



四月二十二日  
明治四十二年  
海峽  
English Channel  
の海峽  
Kent  
イングランド  
の東端の  
一州

は、夜となく、晝となく、苟も此の下に船の影さへ見えたなら、内外何れの國の船たるを問はず、必ず其の名を聞き、其の行先を尋ね、さては其の用向を聞いて、傳ふべき處に傳へる。かく世界的に出來た處に育つた潮の岬の人々として、其の中から濠洲や米國に出稼する者の多く出て來るのは無理もない。荒海を見慣れた眼には、對岸を隣國と心得てゐるかも知れぬ。潮の岬の民は小さいながらも世界の民だと思つて、ふと自分の事に氣がつくと、今日は四月の二十二日、去年の今日は朝日世界一周會で愈、紐育の見物を終へて、明日大西洋に乗り出さうとした日、一昨年今日は丁度今頃巴里から倫敦へ向ふ途中、海峽を過ぎて、ケント州の櫻桃、杏梨

淀

今は砲艦になつた  
千二百五十トン  
全速力二十ノツ  
明治三十三年横須賀で進水  
三木露風  
詩人  
名は操  
明治二十二年兵庫縣龍野町生

今を盛と咲亂れた中を走つてゐた頃である。愈、これは世界的になつて來た。折しも望樓で頻に信號旗が揚る。それとばかり、友を促して急いで見に行けば、望樓長は芝生に立てた望遠鏡の下に、信號旗を上げよ下げよと忙しげに指揮してゐる。隣の無線電信局では、ばち／＼とけたゝましい音を立てて電信をかけてゐる。今まで靜まり返つてゐた此の日の本の本土の最南端の一角は、俄かに色めき立つて見えた。沖には通報艦の淀が行く。(へちまのかは)

三 紅椿

三 木露風



山越えて來たふるさとの  
家の籬に、たゞ一つ  
紅い椿が咲いてゐる。

あゝ紅椿、紅椿、  
ありし昔をそのまゝに、  
夢ともならで咲く花よ。

昨日吹いた西風は、  
遠い響となつて消え、  
けふ麗かな海の町。

あゝ西風のやんだやう、  
我が楽しみも過ぎ去つて、  
ひとりしみぐ海を見る。

ふるさとの、ふるさとの  
家の籬の紅椿。  
その葉を越して  
海を見る。(青き樹かげ)

四 峠の茶屋

夏目漱石

夏目漱石  
名は金之助  
英文學者  
小説家  
江戸生  
大正五年歿  
年五十



「おい」と聲を掛けたが、返事がない。  
軒下から奥をのぞくと、煤けた障子が立てきつてある。向側は見えない。

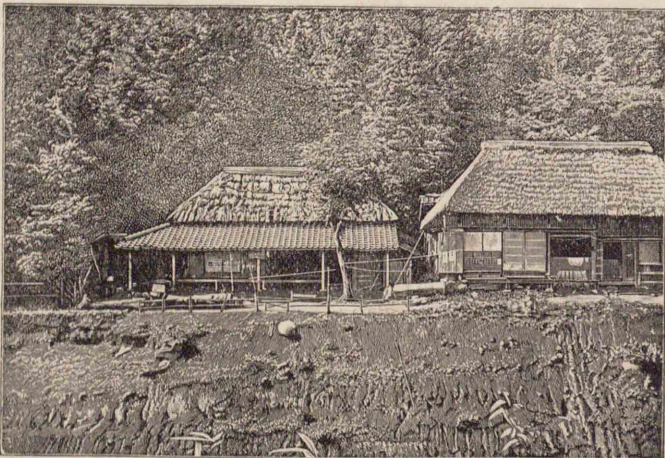
五六足の草鞋が寂しさうに庇から吊されて、屈託氣にふらりふらりと揺れる。下に駄菓子箱が三つばかり並んで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつてゐる。

「おい」とまた聲を掛ける。土間の隅に片寄せである白の上にふくれてゐた雞が驚いて眼をさます。くゝゝ、くゝゝと騒ぎ出す。敷居の外に、土竈が今しがたの雨に濡れて半分ほど色が變つてゐる上に、眞黒な茶釜がかけてある。土の茶釜か銀の茶釜かわからない。幸ひ、下は焚きつけてある。

文久錢  
文久三年に造つた青銅貨  
當時は四文  
明治以後は一厘五毛

峠の茶屋

この寫眞は熊本縣飽託郡芳野村にある峠の茶屋で、漱石が熊本の第五高等學校に教授をして居たころ旅行して休んだ家だといふ



峠の茶屋

返事がないから、無斷でずつと這入つて、床几の上へ腰を鉚した。雞は羽搏きをして白から飛下りる。今度は疊の上へあがつた。障子が締めなければ、奥まで駈けぬける氣かも知れない。雄が太い聲でこけつこつこつといふと、雌が細い聲でけゝつこつこつといふ。まるで人を狐か狗のやうに考へてゐるらしい。床几の上には一升枡程な煙草盆が閑靜に控へて、中に



は、とぐろを捲いた線香が日の移るのを知らぬ顔で、頗る悠長に燻つてゐる。雨は次第に収る。しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がざらりと開く。中から一人の婆さんが出た。どうせ誰か出るだらうとは思つてゐた。竈に火は燃えてゐる、菓子箱の上に錢が散らばつてゐる、線香は暢氣に燻つてゐる、どうせ出るには極つてゐる。しかし、自分の店をあけ放しても苦にならないと見える處が都とは少し違つてゐる。返事がないのに、床几に腰をかけて、いつまでも待つてゐるのも、少し二十世紀とは受取れない。

「お婆さん、此處を一寸借りたよ。」

「はい、これは一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎な御天氣で、さぞお困りでござんしよ。おゝ、大分お濡れなさつた。いま火を焚いて乾かして上げましょ。」

「そこをもう少し焚付けてくれ、ば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあ御茶を一つ。」

と立ちあがりながら、しつくと二聲で雞を追下げる。

こゝこゝと駈出した雌雄は、焦茶色の壘から駄菓子箱の中を踏みつけて往來へ飛出す。



「まあ一つ。」と、婆さんはいつの間にか刳抜盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦げてゐる底に、一筆がきの梅の花が三輪、無造作に焼きつけてある。

「御菓子を。」と、今度は雞の踏みつけた胡麻ねぢと微塵棒を持

筆蹟  
家二軒柳二本の  
在所かな  
漱石

いふこと  
いふこと  
漱石

蹟筆石漱目夏

つて来る。

婆さんは袖無しの上から襷をかけて、竈の前へうづくまる。余は懷から寫生帖を取出して、婆さんの横顔を寫しながら話をしかける。

「閑静でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「え、毎日のやうに鳴きます。此の邊は夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、尙聞きたい。」

「生憎今日は——先刻の雨で何處へか逃げました。」

折柄竈のうちがばちくと鳴つて、赤い火がさつと風を起して一尺あまり吹出す。

「さあおあたり。さぞお寒かる。」といふ。軒端を見ると、青い煙が突當つて崩れながら、微かな痕をまだ板庇にからんでゐる。  
(漱石全集)



土岐善磨

歌人

新聞記者

明治十八年東京生

五 二つの聲

土岐善磨

この鶯は、ある朝ひよつくり窓から書齋へ飛込んで來たのだ。わけもなく捕へられたので、そのまゝ有合せの小さい籠に飼ふことにした。もとより藪鶯で、ろくな鳴聲ではなかつたが、それでも、「ほうほけきやう」と鳴くことは知つてゐた。水をやつたり餌をやつたりしてゐるうちに、すつかり馴れて、朝の寐覺などに夢現ともなく床の上で聞いてゐるのが樂みになつた。

茶の間の方には、前から九官鳥が一羽飼つてあつた。「お早う」などはよく言へるやうになつてゐたが、この鶯がやゝ離

九官鳥

燕雀類の一種  
かけすなどとは  
ほ同じ大きさ  
羽毛は黒く眼の  
下から後頭にか  
けて黄金色の露  
出部がある  
嘴は赤く脚は黄  
いろい  
よく人の言語を  
まねる  
支那の原産



九官鳥

れた書齋の方で、「ほうほけきやう」と鳴くやうになつてから、じつと聞耳を立ててゐた九官鳥は、いつのまにか鶯が「ほう……」と鳴きはじめると、すぐそのあとを承けて「ほけきやう」と物眞似のいたづらをするやうになつた。「ほう……」と息をふくめてから、さて「ほけきやう」と朗かに歌はうとしてゐる鶯にとつて、どこからともなく聞えるこのお先走りの自分の歌聲は、山深く反つてくる木魂とは違つたもので、不思議な、薄氣味の悪いものだつた。



「ほけきやう」を續けるのを止めて、最初の「ほう……」といふのを少し長く延して、あとの不思議な歌聲を待つてゐると「ほけきやう」と鏡の反射のやうに聞えてくる。鶯はこの怪しい不氣味さに堪へられなくなつて、遂に「ほけきやう」といふ歌聲を自分の唇から出すことを憚るやうになつた。九官鳥は「ほう……」と聞いて「ほけきやう」と續けるのを初めのうちはおもしろくも思つてゐたが、相手が歌はなくなつたので、自分も興がなくなつて「ほけきやう」と鳴かなくなつたのだが、その間に、ほんたうの鶯の方はまた、自分の歌聲も忘れた氣持になつて、たゞ「ほう……」といふだけで止めてしまふ習性がついてしまつた。「ほう……」と鳴くだけで「ほけきや

う」のない歌聲は、藪鶯にしても餘りに不器用だが、その後口笛で教へこまうとしても、なほ不思議がつて、どうしても相變らず「ほう……」とだけしか鳴かない。

これはN君の家でのことなのだ。この間遊びに行くと、その書齋に鳥籠があつた。そして小さい鶯が首をかしげて「ほう……」と鳴いて、そのまゝ黙つてしまふのを不審に思つて聞いたところが、こんな話をしてくれたのである。

一體、九官鳥の本來の鳴聲はなんといふのだらうか、鶯ならどんな藪鶯でも「ほうほけきやう」と大抵は鳴くのだが、九官鳥は人間の話聲などの眞似を巧にするけれども、眞似はいかにうまくても、本來の鳴聲にはなり得ない。「お早う」と呼



びかけても人間にならないと同様に「ほう……」のあとを承けて「ほけきやう」と鳴いても、やはり鶯にはならないのだ。「ほう……」と鳴いただけで、あとを真似られたために「ほけきやう」を忘れてしまった鶯も、ふがひないと言へばふがひないやうなもの、それでも鶯であることは動かし難い事實だ。「ほう……」といふ最初の歌聲まで、九官鳥は真似ることがあるかも知れない。またその「ほう……」といふのまで、この鶯は言はなくなつて、黙々としてたゞ籠のうちにあたりを見廻すやうになつてしまふかも知れない。

「どちらの生活が幸福なのですかね。」

「お伽噺みたやうな問答ですな。」

わたしはN君とこんなことをいつて、新しく運ばれた紅茶を飲んだ。(春歸る)

### 六 本多重次

新井白石

天正十三年、徳川殿御背中、に疔といふもの出来て既に危く見えさせ給ひしかば、内外の醫療術を盡しけれども、その驗なく、唯弱りに弱らせ給ひ、自らもこれまでと思召しけるにや、宗徒の御家人等召集めて、御跡の事ども仰せ置かる。人の周章いふに及ばず、土民百姓等に至るまで、その程々に従ひて祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。重次御枕に取りつきて泣くく、申しけるは、殿も定めて覺

本多重次  
通稱は作左衛門  
徳川氏の臣  
文祿五年(三三〇)歿  
年六十八  
新井白石  
名は君美  
徳川時代の大儒  
政治家  
享保十年(三三五)歿  
年六十九  
天正十二年  
正親町天皇の御代(三三五)  
徳川殿  
徳川家康





新東井帝京白物館石藏

えさせ給ひなん、重次が昔此の病を受けしに、たちどころに  
 験を得し良醫の候。彼を  
 召して見せ試み給ふべし。  
 と申す。「諸醫既に手を束  
 ね、家康亦死を決す。この  
 上醫療其の詮なし。且は  
 命を惜むに似たり。」とて用  
 ひ給はず。

重次大いに怒つて、「斯程大  
 事の腫物軽々しく思召し  
 侮つて、事急なるに臨めばこそ諸醫も術盡きぬれ。それに

筆蹟

御手書被<sub>レ</sub>下<sub>サ</sub>辱<sub>ク</sub>  
 拜見仕候如<sub>ク</sub>仰<sub>ル</sub>  
 雨濕之節彌御堅<sub>ク</sub>  
 固被<sub>レ</sub>成<sub>リ</sub>御坐<sub>リ</sub>  
 珍重奉<sub>レ</sub>存候沙<sub>カ</sub>  
 而先日御枉臨<sub>ニ</sub>  
 爲<sub>シ</sub>御禮<sub>ヲ</sub>昨日參<sub>リ</sub>  
 拜之儀被<sub>レ</sub>仰<sub>ル</sub>下<sub>サ</sub>  
 重疊過當之至辱<sub>ク</sub>  
 次第奉<sub>レ</sub>存候猶<sub>ホ</sub>  
 其内以<sub>テ</sub>拜謝<sub>ス</sub>  
 可<sub>ク</sub>申上<sub>ル</sub>候以上  
 四月廿五日  
 新井筑後守  
 豆州様

又良醫して治し參らせんと  
 するをも用ひ給はず、亡せた  
 まはんこと、御心がらとは言  
 ひながら、あつたらしき命か  
 な。諸醫、術盡きぬと申す上  
 は、彼いかでか治し參らすべ  
 き。年老いたる重次が御跡  
 にさがつての御供叶ふべか  
 らず。さらば御先へ參らん。  
 とて、御前を罷り立つ。  
 徳川殿大いに驚かせ給ひ、「あ

六 本多重次

三

御手書被<sub>レ</sub>下<sub>サ</sub>辱<sub>ク</sub>  
 拜見仕候如<sub>ク</sub>仰<sub>ル</sub>  
 雨濕之節彌御堅<sub>ク</sub>  
 固被<sub>レ</sub>成<sub>リ</sub>御坐<sub>リ</sub>  
 珍重奉<sub>レ</sub>存候沙<sub>カ</sub>  
 而先日御枉臨<sub>ニ</sub>  
 爲<sub>シ</sub>御禮<sub>ヲ</sub>昨日參<sub>リ</sub>  
 拜之儀被<sub>レ</sub>仰<sub>ル</sub>下<sub>サ</sub>  
 重疊過當之至辱<sub>ク</sub>  
 次第奉<sub>レ</sub>存候猶<sub>ホ</sub>  
 其内以<sub>テ</sub>拜謝<sub>ス</sub>  
 可<sub>ク</sub>申上<sub>ル</sub>候以上  
 四月廿五日  
 新井筑後守  
 豆州様

新井白石筆蹟



れ止めよ。」と仰せければ、近く侍ふ人々走り出て、引留め、「仰せらるべき旨あらせられ候。」といふ。重次大いに聲を怒らし、最後の暇乞うて罷り申す者を見苦しい殿ばらの止めやうや。」と罵つて出でんとす。「されば候。その人を止めよとの御使が、えこそ止めねと申せとは、おとなしくも候はぬ本多殿。」といはれて、「げにさも候。」とて御前にまゐる。

徳川殿、汝は物に狂ひてかくはいふか。家康未だ死し果てぬに、縦ひ家康が命終るとも、汝等が世に在らんを頼にこそ死すべけれ。又汝等も如何にもして、一日も世に残りて、若き者ども掟して、我が家の絶えざらんやうを計らんとは思はずして、詮なき死の供せんとする事やある。」と仰せければ、

「いや、それは人によりての事に候。重次も今少し年だに若く候はんには、仰までも候はず、犬死せん人の御供、その詮なし。重次、若年の昔より此處彼處の軍に従ひて、眼射られ、指落され、足切られて、負はぬ手も候はず。人のかたはといふ程のかたはは、重次が身一つに餘つて、世に交らんこと叶ふべき身ならず。殿の御情深ければこそ、當家にては人に畏れられも敬はれもしつれ。殿の亡くならせたまひなば、他人までも候まじ、まづ御塔の北條殿、我が國々を取らんとし給はん、若き人々が行末久しう仕へんと頼みきつたる主に忽ち別れて氣後れしはか、しき矢の一筋をも射出すこと叶ふべからず。當家滅されんこと、亦踵を回らす

御塔  
家康の女塔北條  
氏直  
天正十九年(三五)  
一卒  
年三十



武田  
武田勝頼  
天正十年(一五八二)  
織田徳川の兩軍  
に攻められ天目  
山で自殺した  
年三十七

べからず。重次それまで存へて、あの年よつたるかたはも  
のは徳川殿の譜代にて、何がしといはれし家人なるが、いか  
に惜しき命なれば、かく世に恥をさらすらん。と後指さゝれ  
ん事、老の恥、何事かこれに過ぎ候べき。此の頃までも武田  
の家の人々、御當家へ召されて、さらぬ人にも手を下げ腰を  
屈めしを世にもあはれに思ひしが、今は此の老人めが身の  
上になつて候と存ずれば、殿に後れ參らせんが悲しきばか  
りにも候はず、我が身の果もあさましきによつて、御先に死  
することにて候。と申す。

「汝が言ふところ、ことわり至極せり。さらば醫療のことは  
汝が心に任すべし。天命すでに到りて、家康空しくならん

とも、汝も亦家康が心に任せ、いかなる恥を見つべくとも、一  
日も生殘つて、後の事よきにはからふべしと存ずるや否や。」  
と仰せければ、重次が申す旨に任せられんには、重次いかで  
また仰をや背くべき。と申す。「さらば、醫師召させよ。」とて、召  
さる。

醫師やがて參つて、「御灸治宜しかるべし。」と申せば、重次艾取  
つて据う。御灸の痛み覚えさせ給はねば、艾を増し加ふる  
こと多くして後、聊か痛ませ給ふ由仰せければ、御薬をつけ  
て參らせ、御薬湯をも進め奉りしに、その夜の半ばに、御腫物  
潰れて、膿水、血、夥しう流れ出で、御惱たちどころに輕ませ給  
へば、重次は嬉し泣に聲を限りに泣く。御前伺候の人々も



感涙を共に流しけり。(藩翰譜)

佐佐木信綱

號は竹柏園

歌學者

歌人

文學博士

明治五年三重縣

伊勢國石藥師生

七 松坂の一夜

佐佐木信綱

時は夏の半ば、「いやとこせ」と長閑やかに唄ひつれて行くお伊勢参りの群も、春先ほどには騒がしからぬ伊勢松坂なる日野町の西側、古本をあきなふ老舗柏屋兵助の店先に、「御免」といつて腰をかけたのは、魚町の小兒科醫で年の若い本居舜庵であつた。舜庵は醫師を業としては居るものの、名を宣長といつて、學問には非常に熱心な人で、皇國學の書やら漢籍やらを常に買ふこの店の華客であるから、主人は笑ましげに出迎へたが、手を打つて、「あゝ残念なことをしなされ

本居舜庵

本居宣長

國學四大人の一

享和元年(四六)

歿

年七十二

岡部先生

賀茂眞淵

國學四大人の一

明和六年(四三)

歿

年七十三

た。あなたがよく名前を言つておいでになつた江戸の岡部先生が、若いお弟子たちとお供とをお連れなされて、さきほどお立寄になりましたの。」と言ふ。舜庵は「岡部先生が

田安様

田安中納言宗武

徳川八代將軍吉

宗の子

明和八年(四三)

卒

年五十七



賀茂眞淵 佐佐木信綱藏

さらうといふので、一昨日あの新上屋へお着きになつたところが、少しお足に浮腫が出たとやらで御逗留、今朝はもう



お宜しいので、御出立の途中、何か古い本はないかと暫くお休みになつて、参宮にお出かけになりました。「舜庵、それは残念なことである。どうかしてお目に懸りたいが。」跡を追うてお出でなさいませ、追附けるかもしれませぬ。」と主人がいふので、舜庵は一行の様子を大急ぎで聴取つて、跡を追つた。

湊町・平生町・愛宕町を通り過ぎ、松坂の町を離れて次の宿なる垣鼻村まで行つたが、どうもそれらしい人に追ひつき得なかつたので、すごく〜と我が家に戻つて來た。

數日の後、岡部衛士は神宮の参拜を濟ませ、二見が浦から鳥羽の日和見山に遊んで、夕暮再び松坂の新上屋に泊つた。

二見が浦  
神宮の東方二見  
村の海濱  
鳥羽  
三重縣志摩郡に  
ある港

村田春郷  
江戸の人  
國學者  
明和五年(一四六)  
歿  
年三十  
春海  
國學者  
文化八年(一四七)  
歿  
年六十六



本居法橋  
宣慶有  
長筆

「若し歸りにまた泊られたなら、どうか知らせて貰ひたい。」と頼んでおいた舜庵は、夜に入つて新上屋からの使を得た。

樹敬寺の塔頭なる嶺松院の歌會に赴いて、今しも歸つて來た彼は、取るものも取敢へず旅宿を訪うた。同行の弟子の村田春郷は二十五、その弟の春海は十八の若盛で、早衛士は一人、行燈の下に舜庵を引見した。

賀茂縣主眞淵、通稱岡部衛士は、當年六十七歳、その大著たる



冠辭考

十一卷

枕詞の解釋の書

萬葉考

二十七卷

萬葉集の註釋

有徳公

八代將軍徳川吉

宗

寶曆元年(四二)

薨

年六十八

契沖

大阪圓珠庵の僧

國學の大家

元祿十四年(三六

一)歿

年六十二

古事記

三卷

神代から推古天

皇までの事蹟を

記した我が國最

古の歴史

冠辭考萬葉考なども已に成り、將軍有徳公の第二子田安中納言宗武卿の國學の師として其の名噴々たる一世の老大家である。年老いたれど頗豊かなる此の老學者に相對してある本居舜庵は、眉宇の間に迸つてゐる才氣を溫和な性格に包んでゐる三十四歳の壯年。しかも彼は二十三歳にして京都に遊學して醫術を學び、二十八歳にして松坂に歸つて醫を業としてゐたが、京都では唯醫術を學んだのみでなくして、契沖の著書を讀破し、國學の蘊蓄も深かつたのである。舜庵は長い間欽慕してゐた身の、ゆくりなき對面を喜んで、豫て志してゐる古事記の註釋に就いてその計畫を語つた。

老學者は若人の言を靜かに聞いて懇にその意見を語つた。「我も固より神典を解き明らめんの志があつたが、それには先づ漢意からしうを清く離れて、古の眞の意こころを尋ね得ねばならぬ。古の意を得んには、古の言ことばを得た上でなければならぬ。古の言を得んには、萬葉をよく明らめねばならぬ。それ故、我は専ら萬葉を明らめてゐた間に既にかく年老いて殘の齡いくばくも無く、神典を解くまでに至ることを得ない。御身は年若でゆくさきが長いから、怠らず勉めなば、必ず成し遂げられるであらう。しかし世の學に志す者は、皆低い所を經ないで、すぐに高い所へ登らうとする弊がある故に、低い所をさへ得ることが出來ぬのである。此の旨を忘れず

萬葉  
二十卷  
我が國最古の歌集



心にしめて、先づ低い所をよく固めて、さて高い所に登るがよい。」と諭した。

夏の夜は早くも更けて、家々の門のみを鎖され果てた深夜に、老學者の言に感激して面ほてりした若人は、さらでも今朝から曇り日の闇夜の道のいづれを踏むとも覺えず、中町の通を西に折れ、魚町の東側なる我が家の潜戸を入つた。隣家なる桶利の主人は律義者で、いつも遅くまで夜なべをしてゐる。今夜もとん／＼と桶の箍を入れてゐる。時にはやかましいと思ふ折もあるが、今夜の彼の耳には何の音も響かなかつた。

村田傳藏  
眞淵の門人  
坂大學の通稱

舜庵は、後に江戸に便を求め、翌十四年の正月、村田傳藏が中

に入つて名簿（みづふ）を捧げ、うけひごとをしるして、縣居門人録に名を列ねる一人となつた。爾來松坂と江戸との間の飛脚の往來に、此は問ひ彼は答へた。門人とはいへ、その相會うたことはわづかに一度、たゞ一夜の物語に過ぎなかつたのである。

今を去る百六十餘年前、寶曆十三年五月二十五日の夜、伊勢國飯高郡松坂中町なる新上屋の行燈の光は、その下（もと）に相語つた老學者と若人とを照した。しかも其のほの暗い燈火は、我が國文學史の上に不滅の光を放つてゐるのである。

（賀茂眞淵と本居宣長）

寶曆十三年  
後櫻町天皇の御  
代  
將軍徳川家治の  
時  
（三三三）



中邨秋香

國學者

御歌所寄人

静岡生

明治四十三年歿

年七十

延享

櫻町天皇の御代

將軍徳川吉宗家

重の時

(1793-1803)

筆蹟

夏日

渡乃原豊榮登朝

日子能御影恐支

六月廻空 眞淵

八 歌話

中邨秋香

あがたの宿

延享某の年の秋、江戸大風雨にて市中處々の人家破損しけるあけの日、賀茂眞淵翁の許に、門人某見舞に行きけるに、翁の家も夜來の風にて屋根大方吹きまくられ、日光席にさし

夏日

渡乃原豊榮登朝  
日子能御影恐支  
六月廻空 眞淵

賀茂眞淵筆蹟

關根正直藏

入り、屋根板狼藉たる中に、翁は平常に異なるさまもなく、机に凭りて沈思吟詠せり。「烈しき風雨にも候ひしかな」とい

ふ聲を聞き、始めて某の來れるを知りけん、顧みて會釋しつつ、餘談に及ばず、此の嵐にて一首出で來ぬ。とて、書きて示しける歌、

野分してあがたの宿はあれにけり

月見に來よと誰にいはまし

とりゐ坂

白河樂翁公年十二にて猶田安の邸におはせし頃、麻布鳥居坂なる戸川内膳の邸宅より火起り、その邊の町家類焼しけり。大火にもあらざりしかど、焼死せしもの多かりしかば、この火事は人の命をとりゐ坂、これより上のとがはいせん

白河樂翁公

名は定信

田安宗武の第七

子

白河の城主松平

定邦の嗣となつ

た

文政十二年(西へ

七)卒

年七十二

田安の邸

江戸城の北丸に

あつた

今の九段坂上近

衛第一聯隊のあ

る處



と落首せる者ありけり。近侍の人々興じ笑ひて、「いかにもよく詠みたり。」と評し合ひけるを、君聞き給ひて、「余が詠まん

樂翁

には、さはいはじ。」

とありければ、奥

醫師の某「さらば、

何とか詠ませ給

ふ。」と問ひまゐら

するに、「言はじ、言

はじ。」とすまひた

まふを、強ひて問ひまゐらせたりしかば、「四の句を怪我のこ  
となり。」といふべきなり。」とあり。即ち、

Handwritten text in a box, likely a copy of the poem or related notes.

松子 平爵 樂翁 筆蹟

筆蹟

樂翁 むかしふしの  
麓を過るとて  
いや高き君かめ  
くみにくらへて  
はちりひちなり  
や雪のふしのね  
あたちか原を  
みて  
末終にあたちか  
原の露のみも國  
を守の鬼となら  
なん

この火事は人の命をとりぬ坂  
怪我のことなりとがはないぜん  
となり。一句のことにて、一首の意味を全く顛倒せしめ、過  
の已み難きに出づるを明かにせられしこと、まことに梅檀  
の二葉とぞいふべき。

Handwritten text in a box, likely a copy of the poem or related notes.

小澤蘆庵筆蹟

燒野の原

天明の火災にて小澤蘆庵が家危くなりし時、翁人々に告げ  
て、「他の品は皆焼きても苦しからず、只書籍だけは一冊も多

梅檀の二葉

梅檀は二葉より  
芳し(謠)

筆蹟

かすめる月か  
けるゑに  
雲もなくなきた  
る空に影みえて  
ゆくともみえず  
霞夜の月 蘆庵  
天明の火災  
光格天皇の天明  
八年(二四〇)將軍  
徳川家齊の時京  
都大火  
皇居も炎上した  
小澤蘆庵  
京都の歌人  
享和元年(二四六)  
歿  
年七十九



太秦  
京都市右京區太  
秦町

瀧澤馬琴

江戸後期の小説  
家

江戸の人

嘉永元年(二五八)

歿

年八十二

蒲生修靜

名は秀實

字は君平

通稱は伊三郎

勤王家

下野宇都宮の人

文化十年(二七三)

歿

年四十六

く出し給はれ。」とて、自身も年來の鈔録本を風呂敷包にし、これを負ひて太秦なるしるべの家<sup>うづまさ</sup>に避けぬ。この火にて内裏の炎上せしよしを聞き、いたく歎きて、翌日未明に太秦を出で、内裏の焼跡を拜し奉りて、

今朝見れば焼野の原となりけり

これやきのふのたましきの庭

(新説歌がたり)

九 蒲の花がたみ

瀧澤馬琴

蒲生修靜、山陵訪求の爲に京に赴きし時、彼の地に絶えて知る人なし。當時小澤蘆庵は古學を好み、萬葉風の詠歌に

名高く、世をすねたる隱逸なりと、豫て傳へ聞きしかば、彼が助を借らばやとて、其の京に入りし日に、やがて蘆庵が宿所を尋ねたり。小澤が家僕出迎へて、「いづこより。」と問ふ。言

寄る由もなきまゝに、修靜まづ伴り

て、「某は下野なる宇都宮のほとりに

て、蒲生伊三郎と呼ばるゝ者なり。

琴を好み候へども、田舎には良き師

なし。主人の翁は琴の妙手にてお

はするよし、東野の果までも隠れなし。これにより、御弟子

にならまくほりして、はるゝと來つるにて候。」といふ。

其の僕心を得て奥に赴き、云々と告げにけん、蘆庵の聲と覺



蒲生 修靜  
原 信 充 筆

東野  
東國なる下野の  
國



しくて、いと高く、あな無益にも訪はるゝものかな。汝出てしか答へよ。主人は久しう客を辭して交を絶ちたれば、都の中にだに親しうものせるは稀なり。琴は若かりし時かき鳴らしたりけれど、あちこちの人に知られて、彼に聞かせよ、此に教へよといはるゝがうるさければ、近頃打擡きて薪に代へたり。かゝれば、所望に従ふべくもあらず。他に行きて求めたまへ。』と言へ。』といふ聲の、襖一重を隔ててぞ聞えける。

修靜、僕が云々といふをも待たず、更におし返して言ふ、翁の御答はこゝにてつばらに漏聞きたり。某なほ一言あり。願はくは、枉げて聞き給へ。吾は下野なる儒者なり。しか

じかの志願あれば、しばゝ江戸に遊學し、こたみ都に上りしかど、相識れる者絶えてなし。翁の古學を好み給ふと、其の氣質の俗ならぬとは、かねて傳へ聞くものから、言寄るよしのなきまゝに、『琴を學ばんために來りつ。』とは言ひしなり。こは長者を欺くに似たれども、其の虚言は已むことを得ざりし實情より出でたれば、許されて對面せられなば、肝膽を吐き志願を告げて翁の助を借らんと欲す。かくても意にかなはずば、退けられんこと勿論たるべし。今一たびわどのを勞せん。この由取次ぎたまへ。』といふ。蘆庵これを漏聞きて、『さりとは思ひがけざりき。そは奇しき客人なり。對面せずばくやしきことあらん。此方へと申せ。』とて、やが



て面をあはせけり。

修靜深く歡びて、夙くより思ひ起せる志願の由を説き示し、山陵志著述のために古き御陵を尋ねんとて旅寢をしつる



小 澤 蘆 庵

事の趣云々と語り出でつるに、蘆庵も只管感歎して、足下は得難き學士なり。さる志ならんには、吾が庵に杖を留めて、こゝらわたりの御陵を徐かに訪求

したまへ。とて、又他事もなくもてなしけり。

これによりて、修靜は日毎に古陵を尋ね巡るに、ともすれば日暮れて歸るに、主人は自ら風爐を焚きて湯あみせさせ

れば、修靜、老人の心づかひ心苦し。とて辭めども、従はず。「これらの事は只管に客を愛する故のみにあらず。吾も亦かかる奇人に宿することの歡ばしく、且は足下の疲勞を慰めて、國のために力を竭す人の助にならんとてなり。必ずいなみ給ふな。とて、後々までもしかしてけり。

かゝりし程に、修靜ある夜更闌けて、子二つの頃歸りしかども、蘆庵は寝ねず待ちて居り。例の如く湯あみせさせ、飯をすゝめて、さていふやう、吾足下に宿せし日より、蔬菜の外に物もなく、させるもてなしはせざれども、夜は老僕を休らせんとて、手づから風爐さへ焚くを思ひ汲み給はずや。古陵を尋ね巡ればとて、今までは要なからんに、道草食うてか。



等持院  
京都市上京區衣笠町にある臨濟宗の寺  
足利氏の菩提寺  
足利義詮創立

老人に物を思はせ給ふこと心得難し。とつぶやきけり。修靜聞きて容を改め、翁の恨理なり。吾が非を飾るにあらねども、更闌けたるは聊か故あり。懺悔の爲に笑に供へん。けふはそれの天皇の御陵を尋ねたりしに、日の暮るゝまで尋ねもあはで、思はずも等持院なる尊氏の墓を見たり。ここに至りて、年來の恨心頭に起りて堪へられず、墓に向ひて罵るやう、梟臣尊氏、なほ靈あらば、今言ふことを確かに聞け。汝が一旦治りたる建武中興の世を亂して、逆に取り逆に守りて毒を後世に流ししより、五百十數年、干戈をさまらず、國の舊典もこれが爲に焼け亡び、王室もまたこれに困りて卑しく、古帝世々の山陵すら迹なくなりて、吾らにさへあくま

靈山  
京都市東山區圓山公園の奥の山  
四條の末に當る  
長嘯子

木下勝俊  
豊臣秀吉の夫人  
北政所の兄木下  
家定の長子  
歌人  
慶安二年(1651)  
歿  
年八十一

で物を思はするは皆悉く汝が罪なり。天罰當に知るべし。』とて、杖もてあたりの石を思のまゝに打毆きつ。かくて寺門を出づる程に物ほしうなりしかば、道のほとりの酒屋に立ちより、怒にまかせて飲むほどに、六七合盡したり。さて、酒屋を出でしかど、酔うて足も定まらず。このまゝにて歸り行かば、必ず翁に叱られん。なかば醒して行かんと思ひて、株に尻をかけしより、熟睡やしけん、時移りて驚き覺むれば、更闌けたり。』と語る。

蘆庵ふきいだして、からくとうちわらひ、さてもく、世の中には似たる馬鹿者もあるものかな。われら亦往ぬる年ある日、靈山の邊に逍遙して長嘯子の墓をよぎりし時、流石



鳥居元忠  
徳川家康の家臣  
慶長五年(一三〇)  
伏見城で戦死し  
た  
年六十二

に宿恨なきにあらねば、行きもえやららず、にらまへて、長嘯子、  
不滅の罪あり。わぬしみづからこれを知るや。わぬしは  
豊太閤の外族とて、位高く、且采地も廣かるに、心ざま武士に  
似ず、伏見の籠城に敵の旗色を見て鬼胎を抱き、鳥居元忠を  
捨殺にせしは不義なり。事平ぎて罪を蒙り、わづかに命を  
助けられしを幸にして、恥を知らず、心にもあらぬ世捨人が  
ほして、えせ歌多く詠じたる、一盲衆盲を引きしより、歌の調  
わろくなりて、今に至るまでなほらぬは、これ不滅の罪にあ  
らずや。冥罰かくの如くならん。と罵りながら、杖をあげて  
あたりの石を殴きたる事ありけり。こは能く似たるにあ  
らずや」と語りもあへず、聞きも終へず、齊しく腹をかゝへた

りとぞ。(兎園小説)

トーチー  
Enrico Toci  
鈴木文史朗  
本名は文四郎  
新聞記者  
明治二十三年千  
葉縣銚子町生

世界大戦  
大正三年から同  
九年に互つた歐  
洲大戦  
ベツカストリニ  
伊太利の勇士  
四年間坑道作  
業に従事し爆  
裂作業で負傷  
して両眼を失  
ふし左腕を失  
ひ只右手の二  
本指でタイブ  
ライターを打  
つた  
リッツォ  
海軍中佐  
オーストリア  
の軍艦を水雷  
士で撃破した勇



トーチーの戦死  
トーチーの戦死

トリーニヤリッツォ中佐と共に、戦争が生んだ新しい伊太利

トーチー

鈴木文史朗

世界大戦後伊太利へ往つて、繪葉書屋などを覗いた者は、  
本脚の兵士が松葉杖  
を敵兵目がけて投げ  
ながら、敵の塹壕の中  
へ飛びこんでゆく繪  
を時々見たに相違な  
い。これがベツカス



ローマ  
Roma (Rome)  
伊太利の首  
府

ナポリ  
Napoli (Naples)  
又ネーブル  
ス  
伊太利西南  
部の大都會

の勇士としてその名をうたはれたエンリコ、トーチーである。ローマの市のあらんかぎり、彼の名は伊太利國民の間に傳はるであらう。

現在彼の父母の住むローマの町はづれなるサン、ロレゾ門外の町は、彼の名を取つてヴィア、エンリコ、トーチーと呼ばれてゐる。トーチーはナポリの貧家に生れた。十四歳にして海軍の志願兵となり、軍艦の機關部に勤務してゐるうち、電氣のことを覚えて、どうやらその方の一通りの技士として立つて行けるだけになつた。

二十三歳のとき船を下り、兩親と共にローマへ引越して、鐵道の機關士となつて一家の生計を立ててゐた。或日の夜

であつた。トーチーが機關車を運轉してゐると、突然故障が起つて、車は俄かにとまつて了つた。同僚があぶないからといつて止めるのも聽かず、トーチーは機關車の下へ這ひこんで修理をしてゐた。ところが、車は急に廻轉し出して、無慙にも彼の片脚を轢きちぎつてしまつた。鐵道省は彼に年金と社宅とを與へた。

彼はこの大怪我で機關士としてはもう立てなくなつたので、指物屋になつた。しかしその元氣は少しも衰へなかつた。やがて、一本脚のトーチーは自轉車及び水泳の名手になりすました。自轉車では、ヨーロッパの周遊を企て、その手始めにアフリカを横斷してスダンまで行つた。水泳で

スダン  
Sudan  
アフリカの中  
部を占める廣  
い地方



タイバー河  
イタリーの中  
部を西へロー  
マを貫流して  
ある河

コロシム  
ローマの圓形  
大演技場  
ネロ皇帝  
Nero Domitius  
(27-68)

は、タイバー河へ飛びこんで溺れようとする小兒を救ひあげた。それは丁度或日の大雨の後であつた。不斷でもあまり澄んでゐないあの有名な川は、出水のため濁流が煮えくりかへるやうに渦巻きながら、箭の如くに流れてゐた。物見高いは何處の國も同じこと、たゞこの光景を見る人間で、川の兩岸は眞黒になつてゐた。が、その溺れてゴム毬の如く押流されて行く子供を誰あつて救助しようとするものなく、群衆はたゞあれよく」と悲鳴に近い聲を揚げるばかりであつた。これを見たトーチーは、松葉杖を傍に投げ捨てるが早い、身を躍らして飛びこんだ。その命がけの行爲は古ローマ帝國の勇士等がコロシムでネロ皇帝の

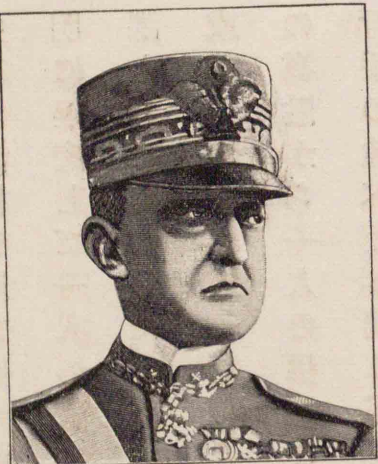
上覽に供した如何なる武藝にもまさる英雄的のものであつたと、今に市民の語草に遺つてゐる。開戦となるや、彼は直ちに従軍を志願した。徴兵官はあきれて、「一本脚が出ずとも、二本脚だけで十分だ」と半ば嘲笑的にはねつけた。しかし、彼の愛國心はその位の冷水でさまさるべくもない。追つかけ引つかけ、時を變へ場所を變へて志願した。四度目には、たうとう戦争狂と見なされて警察の手へまはされ、兩親までも呼出されて、さんくんに説諭をくはされた。この事あつて以來、快活なトーチーは全く沈んで了つた。其の頃伊太利の陸戦は非常な悲境に立つてゐた。北方の



ヴェニス  
又ヴェネチヤ  
イタリーの東  
海岸にある都  
會  
ゴンドラ  
Gondola ヴェニス市の  
中で用ひられ  
る小舟  
Grand Canal ヴェニス市の  
中にある運河

水都ヴェニスは一時危いとまで傳へられ、勝誇れる奥太利軍の先鋒の一部は、奪ひ取つたゴンドラへ機關銃を据附けて、グラント、キャナルへ侵入して來たとさへ取沙汰された。この伊太利の國家が明日をも知らぬといふときに、さうして自分の朋輩といふ朋輩は、最愛の妻も子も親もすべて打捨てて戰場に走つてゐるときに、鐵道省の恩金でたゞ安穩に暮してゆくことは、溢れんばかりの熱情を持つた彼には、何よりも腑甲斐なく、堪へがたいことであつた。彼には老いたる兩親はあつたが、妻子はなかつた。彼が命をも喜んで捧げ得る唯一の相手は、彼の若々しい腦裏に描かれてゐる美しい伊太利であつた。彼の持つて生れた熱情が、愛國

チヴィターレ  
Civitate  
アオスト親王  
Aosto



王親トスオア

つた。さうして最愛の自轉車に乗つて、飄然として北方の戰場へと志して家を出た。ヴェニスまではローマから汽車でゆき、そこからは自轉車でチヴィターレへと向つた。

チヴィターレは當時伊太利陸軍中、最も惡戦苦闘を續けてゐたアオスト親王の率ゐる第三軍司令部の所在地であつ



た。第三軍司令官アオスト親王は伊太利皇帝の従弟で、英邁果斷に加ふるに、現伊太利皇室一家の特性たる純眞な民主的の性格を以て知られてゐた。親王は馬を好み、毎日未明に起床して、一人の青年武官を連れて騎乗することを日課としてゐられた。

或朝例により馬を走らせて、市の郊外にさしかゝると、鈴懸の樹陰から一人の男がころげ出るやうにして立現れ、馬の行手の地べたへ倒れざまに坐つたまゝ、殿下に願がございませぬと叫んだ。其の聲はむしろ泣聲に近かつた。驚いて首をあげた馬を制しつゝ、アオスト親王は馬上からじつと其の男を見つめられた。見れば一本脚の不具者で、三十

にはまだ遠いらしい。健康そのもののやうな顔には、思ひ迫つた感情が溢れて、頬には涙さへ流れてゐる。青年は更に叫んだ。

「私は従軍志願の者です。陸軍省は私が不具者だからとて、それを許しません。しかし私は二本脚の者よりも働ける自信があります。私を従軍させて下さい。殿下は陛下の従弟であらせられます。殿下の外には私の望を叶へさせて下さる方はありません。私の愛國心には、つゆいつはりはありません。」

親王は、初めの中は、この男ふざけてゐるのかと思はれたが、彼のいはゆる嘆願を聽きをへるかをへないうちに、馬上か



らひらりと降りて彼を扶け起し、その両手を固く自分の両手に握りしめながら、

「あなたのやうな青年が一人でもゐる間は、伊太利は大丈夫です。あなたの願はよくわかりました。が、一存にはいかないから、當事者と相談して、今日といはず午前中にも決定するやうにしませう。」

親王は傍に落ちてゐた杖を拾ひあげて彼に渡し、幾度か馬上から振りかへりつゝ、そこを立去られた。

かうまでして、エンリコ、トーチーは陸軍の一兵卒となつた。さうして彼の入つた隊は、歐羅巴諸國の陸軍の中で有名な狙撃隊であつた。この隊は歩兵にも砲兵にも屬しない特

殊隊で、一樣に精巧な狙撃銃を肩にかけて自轉車に乗り、隼の如くに戰場を去來する慄悍な動作で威名を轟かしてゐた。伊太利の觀兵式の時にも、この隊ばかりは突撃の分列式に参加する特權をもつてゐる位であつた。

自轉車でアフリカの沙漠までも横斷した事のあるトーチーには、自轉車隊ともいふべきこの狙撃隊は、全く打つてつけのものであつた。隊中、自轉車に乗る伎倆にかけては彼に肩を比べる者がなかつた。普通の人には、歩行すら困難な場所を、彼は平氣で自轉車を走らせた。自轉車は彼の失つた一脚に代つて動いてゐるものの如くであつた。彼が入隊後幾ばくもなく、隊中の模範となり、誇となるに至つた。



ことは改めて説明するまでもあるまい。狙撃隊ばかりか、第三軍を通じて、兵士等がわれと我が勇氣を振ひ起さうとする時には、皆口々に言つた、「――一本脚のトーチーさへも……と。」

拔擢されて、彼は狙撃隊の傳令となつた。砲煙彈雨の中を冒して、でこぼこの戦場を西に東に、岩乗造りの重い自轉車を片脚で踏みしめ、背を圓くして走る彼の姿を見たばかりで、隊中の士氣は忽ちに振ひ起つた。任務に出た彼の歸りが遅いのを氣遣ふ指揮官の雙眼鏡のレンズに、破損した自轉車を背負つて、有合ふ木の枝を杖に、一生懸命ひた走りに走つて來るばつた蟲のやうな彼の姿が映つた時、嚴肅

レンズ  
Lens

アドリヤ海  
Adriatic Sea  
イタリーの東方にある海  
イソンゾ川  
Isonzo  
トリエストの近くの小川  
モン、ファルコーネ  
Mon Falcone  
ネ

な氣に打たれて、思はず脱帽して胸に十字を切つたとは、指揮官自身の物語である。

やがてトーチーの死すべき時は來た。一千九百十六年の夏、伊太利の附け根ともいふべき北部國境の南を流れてアドリヤ海に注ぐイソンゾ川の畔に於ける伊太利軍第五回總攻撃は始つた。このイソンゾ川の戦は、敵味方にとつて、全局の勝負をも決すべき戦であつた。トーチーは此の時、モン、ファルコーネ――鷹の山――附近の戦線に立つてゐた。モン、ファルコーネはイソンゾ川を隔ててアドリヤ海の囊の底に立ち、いはば塙伊戦線の基點で、イソンゾ川の臍である。敵味方ともこの山の戦に主力を傾けたのはそれ



がためだ。

伊太利軍砲兵隊は八月三日悉く陣地につき、こゝに攻撃準備は完結して、全軍武者振ひしつゝ、命令一下を待った。第一の命令は下つて、右翼モンファルコーネ東北の高地に對し、翌くる四日から猛烈な攻撃は開始された。トーチーはこの攻撃隊の中にゐた。この戦闘は伊太利軍第一の難戦苦闘であつた。兩軍とも死力を竭して攻守した。血と砲弾と肉と劍戟と擲弾とは、空地地面地の底までも満たすやうに飛びかうた。しかも第一日の戦には、敵味方とも一寸の地點をも變じない。砲撃や射撃の戦ではもうなくなつた。野戦の最後の決戦たる突貫戦——然り其の方面の全軍を

擧げての突貫戦を、翌日を期して決行するより他に術はなかつた。この命令が傳はつた時、トーチーはその突貫隊の第一列に入ること志願した。しかしこの突貫ばかりは自轉車ではやれないので、斷られようとする、彼は松葉杖を脇の下にあてて、このやうに立派に走れると、鳥の如く疾走して見せた。

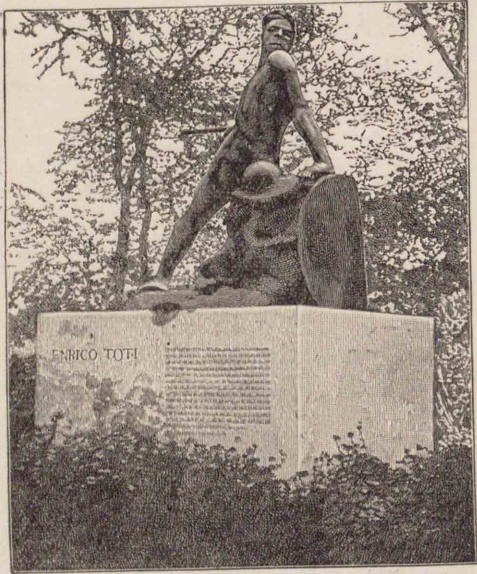
この伊太利陸軍の肉弾戦ともいふべき總攻撃の第二日は、ほのぼのと明けて、燃えあがるやうなりヴィラの八月の日は、淺ましい人間争闘の野を照した。突撃、退却、驀進、一寸の陣地も一日の中に幾度か互に奪取しあつた。勝負は中々決しやうがなかつた。十數度の攻撃に次ぐ攻撃の後、最後

Riviera  
リヴィラ



の——愈、眞の最後の突貫が伊軍によつて試みられた。此の決死隊の眞先に、しかも數歩前に立つて、唯一人エンリコ、トーチーは右腕に例の松葉杖を抱へ、左手に擲彈をつかんで、敵の塹壕目がけて進んで行つた。後から續く全軍はこれを見て一齊に叫んだ、「一本脚のトーチーさへも」と。雨といふよりも暴風のやうに飛來る彈丸の間を、彼は敵の塹壕のきはまで文字通り突貫した。さうして其の身につけてあるだけの擲彈をその中の敵兵に投げつけた。その時、敵の一彈がトーチーの胸部に命中した。と、彼は最後の一瞬に渾身の力を出して、松葉杖を塹壕中の敵兵目がけて投げつけ、やがて斃れんとする身體を其の松葉杖の落ちた上へ

と投げつけた。かくのごとくにして、エンリコ、トーチーは死んだ。



トーチーの銅像

トーチーの最期が伊太利全軍の士氣を振興させたことは實に偉大なものであつた。そのため、彼の戦死後二箇月とたぬ、一千九百十六年九月二十日、伊太利の

最上軍功勳章たる黄金章は、彼の靈前に飾られた。そして彼の老父母の住んでゐるその邸宅の前で、盛大な町の命名



ボルゲーゼ  
Borgese

式が行はれた。ローマのボルゲーゼ公園には、彼が最後の松葉杖を投ぜんとする姿の銅像が建てられてある筈である。  
（東西話行）

横山桐郎

昆虫學者  
農林省蠶業試験  
場技師

東京農業大學講  
師

農學博士

昭和七年歿

年三十九

一茶

小林彌太郎

俳諧寺一茶はその

の號

俳人

信濃の人

文政十年（一八一七）

歿

年六十五

二 螢

横山桐郎

とらるゝも口ゆゑならで螢かな

一茶

ばさりくくと草をたたく音が、今夜も塀の向ふの川岸から響いて來た。それに續いて「光つたく」といふ腕白小僧の甲高い聲が聞えた。私はその聲を聞くと、あゝ又つかまへられて、はかない命をとられてしまふのかと、さびしい氣持になつた。

私の假寓の小さな前栽の前の狭い道路を隔てて、小川が流れてゐる。川といふよりも寧ろ溝といつた方がふさはしいかも知れない。それでも幅は三米、深さは五米ばかりもあらうか。兩岸は崖のやうに切り立ち、雜草や灌木が生ひ茂り、ちよつと谷間のやうな趣をなしてゐる。

五月に入ると、此の川のほとりに僅かばかりの螢が出る。全體を集めても、二百匹そこゝ位だらう。これだけが五月の半ばから六月の初めにかけて出る螢の總數である。此の乏しい螢を、附近の人たちは、日の暮れるのを待構へてつかまへに出る。悪戯さかりのでこ坊や茶目子はいふまでもなく、いゝ年をした者までが、手にくゝ笹の枝を持つて



螢を追つて廻る。螢狩といふとまことに風流だけれど、實は、たまに飛出す一匹二匹の螢を七人も八人も人が奪ひ合ふのである。澤山の狼がたつた一匹の小羊を奪ひ合ふのと、其の狂暴さ、残忍さに於て少しも變るところはない。そして、結局は、

奪ひ合うて踏みつぶしたる螢かな

正巳

の一句を現實に示すに過ぎない。かうした悲劇が毎晩々々私の家の前で演ぜられるのだ。私は此のあさましい光景を見るたびに、つくづく螢とる人たちの無風流と冷酷とを惡み、光ゆゑに、美ゆゑに、さなきだに短い命を更に縮められる此の蟲をかはいさうに思はず

にはゐられない。さて螢といふと、誰しもうそに火といふ事を想ひ出す。まことに螢は火とは離れ得ない縁でつながれてゐる。「ほたる」といふ言葉は火に縁のある言葉で、「火垂る」又は「火照る」などといふ意味から出たのだといふ。支那では螢の事を「夜光」「夜照」「流火」又は「自照」などと稱へてゐるが、これらは何れも皆火に縁のある名である。では、螢といふ蟲は、皆光をもつてゐるかといふに、決してさうではない。我が國にも三十種ばかりの螢があるけれど、その中で光をもつてゐるのは十指を屈するにも足りない。その他は、螢とはいへ、光を持つてゐない。



メキシコ  
北アメリカ合衆國の南にある共和國

守山  
滋賀縣野洲郡守山町  
野洲川の近く

螢は我が國と支那とに限つて産する蟲であるかといふに、それもさうではない。ひろく他の國々にも産する。ことに熱帶地方に産する螢は、體も大きく、光も強くて、優に燈火の代用となる。昔メキシコの海岸に海賊が横行して旅船をおびやかした時、旅船では、夜間燈火を消し、その代りに螢の火を使つて航海して、海賊の難を避けたといふ。又その昔の土人は、手や足の先に螢を結びつけて、燈火の代りとして夜道をしたり、螢を首飾として使つたりしたといふ。我が國でも、現在、近江の守山地方では、夜道をするとき、一本の杖を持つて出て、道ばたの草をたゞき、その都度光る螢の明りで道を見わけて行くさうだ。その他、螢の火を燈火の

車胤

晉代南平の人  
數十四の螢を絹製の囊に入れ、燈火に代用して讀書したといふ

匡房

大江氏  
平安朝の學者  
天永二年(七七二)卒  
年七十一

草が腐つて  
季夏ノ月、腐草化シテ螢トナル。

(禮記)

代用とした有名な話としては、晉の車胤の故事がある。かやうに人々からもてはやされ重寶がられる螢は、一體どうして出來たものであらうかといふ段になると、大抵の人はだまつてしまふ。そして、例によつて偶發説を信ずる者が多い。尤も、螢が塵や芥からわくといふ事は昔から考へられてゐた事で、

五月雨に草の庵は朽つれども

螢となるぞ嬉しかりける

匡房

どの草の螢になるか見てゐたし

竺齋

などといふ歌や句がある。支那の學者なども、草が腐つて螢となるものだと思ひ込んでゐた。しかし、蒔かぬ種は生



えぬ。といふ諺の通り、螢もこれを産む者がなければ、生れるものではない。

夏になると、螢の親は川邊の水際の草の根もとに黄いろい芥子粒ほどの卵を産む。此の卵は、夜になると親同様に光を放つ。そして、生れてから凡そ一箇月もすると、中から薄黒い小さな蛆が生れる。此の蛆は即ち螢の幼蟲である。そして、やはり尾の先に發光器を持つてゐて、何か刺戟を受けると、強い光を放つ。

此の蛆は、その年は蛆のまゝで冬を越し、翌年の四月の末か五月の初めに、水際の土の中に潜り込んで、そこで皮を脱いで蛹になる。この蛹は約二週間で愈一人前の螢になつて

飛出して来る。かやうに、螢の一生は凡そ一年だが、親螢の壽命は先づ三週間で外である。

右に述べた様に、螢の一生は光である。若し螢から光を除いたならば、一箇の醜い蟲として誰も顧みないに違ない。それは、螢仲間でも光を持たないものは全く世に知られてゐないのである。光は實に螢の生命である。

音もせて思ひにもゆる螢こそ

鳴く蟲よりもあはれなりけれ 重之

と歌はれるのも、全く光ゆゑである。

では、彼等は一晩中光り通してゐるかといふに、そんなわけではない。彼等が光り始めるのは先づ八時前後からであ

重之

源重之

平安朝の歌人

三十六歌仙の一

長保二年(六一〇)

卒



丈草

内藤氏

俳人

蕉門十哲の一

尾張の犬山の人

寶永元年(三六四)

歿

年四十二

る。それから夜が更けるに従つて段々にさかんになり、十時十一時に至つて頂點に達する。十二時も過ぎ、一時二時となると、彼等は活動をやめ、草や木の葉の裏に隠れ、その光を収めて靜かに眠に就く。しかし、大抵の人は夜半までも螢を追ひまはすことはしない。先づ九時か、遅くとも十時には家に歸つて寢てしまふ。が、實はそれから後が螢の活動時間なのである。丈草の

呼ぶ聲は絶えて螢のさかりか  
といふ句は、さすがに螢の習性を看破した名吟である。短い夏の夜も明けて、白い陽の光が川面を照す頃、昨夜螢を追ひまはした川岸に立つて見ると、ゆうべあれ程ゐた螢は

どこへ行つたのか、影も形も見えない。しかし、そのあたりの草や木の葉の裏をかへして見ると、昨夜の勇ましさ、美しさに引きかへて、如何にも見榮えのしない、いぢらしい螢の姿を見るであらう。白日の下に引出された彼等は、實に醜い一箇の蟲けらなのである。

螢の光が美といふ點から見て如何にも優雅なことは、こゝに説明するまでもない。しかし、螢は啻に美の方面からばかりでなく、科學的見地からも、亦貴重な光として學者の注意を惹いてゐる。

螢は親も光り、幼蟲も光り、又蛹も光る。して見れば、螢は一年中絶えぬ光をもつてゐる譯である。そののみか、凡そ螢



が地球上に現れてから今日まで、乃至將來とても、一匹残らず地球上からその姿を隠す時が來ぬ限、光の絶えることはない筈である。螢の光こそは眞に永劫の光である。(蟲)

二 札幌農園

菊池 幽芳

札幌に於て最も詩趣に富める地を求むれば、蓋し札幌農園か。札幌農園は農科大學に附屬せるものにして、實に我が邦の模範農園たり。農園としての設備完全なるに近きのみならず、地は即ち石狩平野の一部なるが故に、到底内地に於て求むべくもあらぬ廣大なる地域を領し、凡百の施設整頓して、些の遺憾を感じなく、經營の手腕は縦横に發揮せ

菊池幽芳

名は清

小説家

新聞記者

明治元年水戸生

農科大學

今の北海道帝國

大學農學部

られて餘蘊なきに近し。然れども余はこゝに農園の設備を説かんとするものにあらず。余の記さんとする所は唯その風致にあり、農園の粹たる廣き牧場の風致にあり。西北の二面全く開け、平野遠く連なりて、西は遙かに札幌の障屏をなせる連山の紫翠に接し、北は石狩平野を指してその際涯を知らず。萋々たる牧草、氈の如き處、こゝには彼の中の雜樹の互に相凌ぎ相排するが如きことなく、廣き空間を占めて處まばらに立てる榆ありて、晝は残る隈なく日の光を浴び、夜は思ふがまゝに星の雫を受く。何に遮らるるものもなきその根は、太古のまゝなる土壤より潤澤なる養分を吸取りて、鬱蒼たるその枝葉は以て百歩の地を蔽ひ、



亭々たるその幹は以て百尺の空を摩す。一たび足をこの農園の牧場に入るゝもの、誰か遺憾なく發揮せられたる此の楡の美に驚歎せざるものあらん。それ廣漠たる平野の緑は既に人の心を壯快ならしむ。これに喬木の亭々たるを配する時、更に一段の風致を添へ來るを覺ゆるなり。唯その喬木の種類によつては、またその風致に多少の増減なき能はず。思ふにかゝる平野を飾るに、適せる樹木は松にあらず、杉にあらず、實に其の高さと共に深さを有し、深さと共にまたその幅を有するもの、分明に言へば、その枝葉十重二十重に密生し、鬱然として晝猶暗き樹陰を作る喬木ならざるべからず。請ふ、かくの如き喬木

の森々として青緑の平野に立てる様を想像せよ。何ぞその畫の如くにして又詩の如くなるや。人若し十分にかゝる想像を回らすことを得たりとせば、其の人は即ち遺憾なく札幌農園を其の腦裡に描き得たるなり。農園が楡によつてその風趣を加ふることかくの如し。然れども是なほ靜態に於け



札幌農園の牧場



ホルスタイン  
短角牛  
Holstein  
Shorthorn  
エイアシャー  
Ayrshire  
メリノ  
Merino

る風趣のみ。更に此の間に牛を點じ、馬を點じ、羊を點ずるに至りて、農園の眞風趣は始めて動態となりて活躍す。丈高く、四肢長く、體軀驚くべきほど巨大にして、黑白の斑を有せるホルスタイン種の牛が、その大樹の下に、一は横たはり、一は立てる、或は長方形の體軀をなせる赤色の短角牛、眼優しく四肢短きエイアシャー種の牛等が、此處に彼處に草を食へる、或はさまよへる、或は尾をふれる、更にうるはしき毛を被れるメリノ種の羊が、その角の大にして曲れるには似ず、いと優しき眼光もて馴々しく近づき來るを見ずや。若し此の世に樂園といふものありとせば、その關門は實にかくの如き處なるべし。その繪畫的なる、その詩的なる、又

文章の士  
新渡戸稻造  
志賀重昂  
内村鑑三等

附近の建物と相待つてその米國的なる、少なくともこゝに來る者は、内地の光景と甚だしく相隔れるを感ずるならん。札幌農園は實にかゝる特色を有す。余はかくの如き農園を自然の師として學べる學生の幸福を賀し、又此の學校より往々文章の士を出せることの、決して偶然にあらざるを知れり。(日本海周遊記)

一三 槍ヶ嶽へ

芥川龍之介

山の岨を一つ曲ると、突然私たちの足もとから何匹かの獸が走りだした。

「畜生！鐵砲さへあれば逃しはしないのだが。」

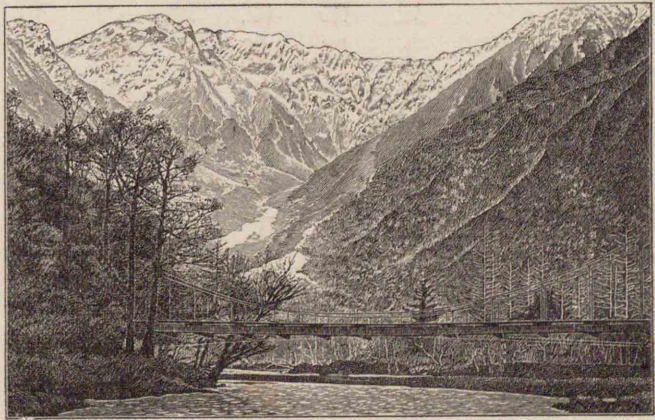
槍ヶ嶽  
飛騨信濃の國境に跨る日本アルプス中の最高峰  
海拔三二七八米  
芥川龍之介  
文學者  
東京生  
昭和二年歿  
年三十六





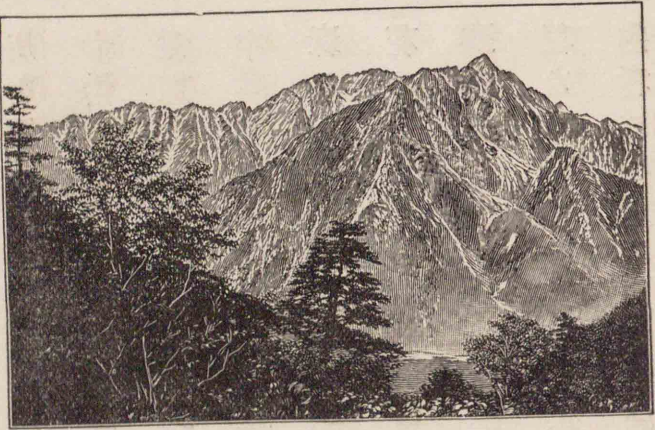


案内者は私を顧みて言つた。私は小さい雜囊の外に何も荷物のない體であつたが、彼は食器や食糧の外にも、私の毛布や外套などを堆く背負つてゐた。それにもかゝらず、峠へかゝると、彼と私との距離はだんくゝ遠く隔りはじめた。三十分の後、たうとう私はたつた一人山路を喘いで行く旅人になつた。うす日に蒸された峠の空氣は無氣味な靜寂を孕んでゐた。馬糞にたかつてゐる蛇目蝶と、塵を煽つ



川 梓

て行く私と、それがこの急な路の上に生きて動いてゐるすべてであつた。と思ふと、鈍い翅音がして、青黒い一匹の馬蠅が、べたりと私の手の甲にとまつた。さうしてそこを鋭く刺した。私は一打にそれを打殺した。「自然は私に敵意を持つてゐる。」そんな迷信じみた心持が一層私をわくくさせた。私は痛む手を抱へながら、無理やりに足を早めだした。



嶽 高 穂



梓川  
長野縣南安曇郡  
 槍ヶ嶽と常念岳  
 との間から出る  
 川  
 下流は犀川とい  
 ふ

山毛櫸  
落葉喬木  
 高さは二十七米  
 にもなる  
 雁皮  
落葉灌木  
 高さ一米半位  
 夏黄色い花が咲  
 く

その日の午後、私たちは水の冷たい梓川の流を徒渉した。川を埋め残した森林の上には、飛驒・信濃境の山々が、殊にうす曇つた穂高嶽が、嶄然と私たちを見下してゐた。私は無愛想な案内者の尻について、漸く對岸を蔽つてゐる熊笹の中へ辿り着いた。對岸には大きな山毛櫸や樅がうす暗く森々と聳えてゐた。稀に熊笹が疎らになると、雁皮らしい花の黄色く咲いた、濕氣の多い草原の中に、放牧の牛馬の足跡が見えた。

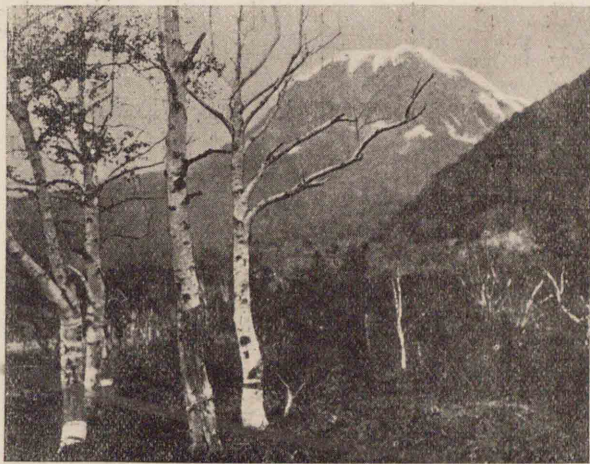
程なく一軒の板葺の小屋が熊笹の中から現れて來た。案内者は小屋の戸を開けると、背負つてゐた荷物を其處へ卸した。小屋の中には大きな圍爐裡が寂しい灰の色を擴げ

てゐた。案内者はその天井に懸けてあつた長い釣竿を取卸してから、私一人を後に残して、夕飯の肴のために梓川の山魚を釣りに行つた。私は蘆や雜囊を捨てて、暫く小屋の前をぶらついてゐた。すると、熊笹の中から、大きな黒斑の牛が一匹のそく側へやつて來た。私は稍不安になつて、小屋の戸口へ退却した。牛は潤んだ眼をあげて、じつと私の顔を眺めた。それから首を横に振つて、もう一度熊笹の中へ引返した。私はその牛の姿に愛と嫌惡とを同時に感じながら、ぼんやり巻煙草に火をつけた。

曇天の夕焼が消えかゝつた時、私たちは圍爐裡の火を圍んで、竹串に刺して炙つた山魚を肴に、鍋で炊いた飯を貪り食



白樺  
落葉喬木  
高さ十米餘  
樹皮は白い  
葉は卵形



白樺の林

つた。それから毛布に寒氣を凌いで、白樺の皮を巻いて作  
つた原始的な燈火をともし  
ながら、夜が戸の外に下つた  
後も、いろ／＼山の事を話し  
合つた。白樺の火と櫓の火  
と、この明暗二種の火の光は、  
既に燈火の文明の消長を語  
るものであつた。私は小屋  
の板壁に濃淡二つの私の影  
が動いてゐるのを眺めながら、山の話のとぎれた時には、今  
更のやうに原始時代の日本民族の生活などを想像せずに

はゐられなかつた。

雑木の重なり合つたのを排いても、う一度天日の光を浴び  
ると、案内者は私を顧みながら、

「此處が赤澤です。」

と言つた。私は烏打帽を阿彌陀にして、眼の前に開けた光  
景を眺めた。

私の前に横たはるものは、立體の數を盡した大石であつた。  
それが狭い峡谷の急な斜面を満たしながら、空を劃つた峯  
峯の向ふへ、目のとゞくかぎり連つてゐた。もし形容の言  
葉をつければ、小さい私たち二人は、正に遠い山嶺から漲り



黄花駒の爪  
黄色な花の咲く  
壺葎



黄花駒の爪

落ちる大石の洪水の上にあるのであつた。私たちらはこの大石の溢れた谷を「黄花駒の爪」の咲いてゐる谷を、蟲の這ふやうに登り

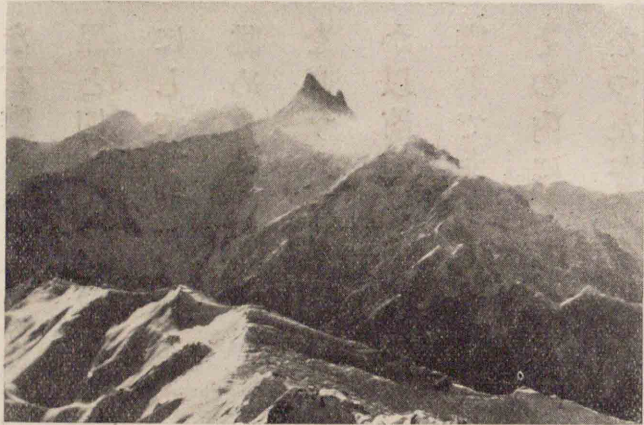
だした。暫く苦しい歩みを續けた後案内者は突然杖をあげて、私たちの左手に續いてゐる絶壁の上を指さしながら、

「御覽なさい。あすここに青猪がゐます。」



羊 猪

と言つた。私は彼の杖に沿うて視線を絶壁の上に投げた。



羚羊  
鹿より小さく角  
には枝がない

嶽ケ羊

すると、荒削りの山の肌が、頂に近く、偃松の暗い線をなすつた處に、一匹の獸が小さく見えた。それが青猪といふ異名を負つた日本アルプスに棲む羚羊カシカであつた。やがてその日も暮れかゝる頃、私たちの周圍には、次第に残雪の色が多くなつて來た。それから石の上に枝を擴げた寂しい偃松の群も見え始めた。私は時々大石の上に足を止めて、何時か



ラスキン  
Ruskin (1819—1900)  
英國の文學者  
美術批評家

姿を露しだした槍ヶ嶽の絶巔を眺めやつた。絶巔は大きな石鑊のやうに、夕焼の餘炎が消えかゝつた空を、何時も黒と切抜いてゐた。「山は自然の始にして又終なり。」——私はその頂を眺める度に、かういふ文語體の感想を必ず心に繰返した。それはたゞか以前讀んだラスキンの中にある言葉であつた。

その内に、寒い霧の一團が、もう暗くなつた谷の下から、大石と偃松との上を這つて、私たちの方へ上つて來た。さうしてそれがあたりを包むと、小雨交り



鳥 雷

の風が俄かに私たちの顔を吹きはじめた。私は漸く山上の寒さを肌を感じながら、一分も早く今夜宿る無人の岩室に辿り着くべく、懸命に急角度の斜面を登つて行つた。が、ふと異様な聲に驚かされて思はず左右を見廻すと、あまり遠くない偃松の茂みの上を、流れるやうに飛んで行く褐色の鳥が一羽あつた。

「何だい、あの鳥は。」

「雷鳥です。」

小雨に濡れた案内者は、強情な歩みを續けながら、無愛想にかう答へた。(うめ・うま・うぐひす)



九十九里濱

千葉縣の東海岸の砂濱

北は下總の銚子町の南飯岡岬から南は上總の大東岬迄六町一里(約六百五十五米)にして九十九里あるといふ

德富健次郎

文學者

號は蘆花

肥後國水俣生

昭和二年歿

年六十

大東

大東岬

千葉縣上總國夷隅郡大東村

飯岡の岬

千葉縣下總國海上郡飯岡町

ながらみ貝

きしやごの一種中の肉を食べる殻はおはじきに用ひる

一四 九十九里濱

德富健次郎

濶さ一町餘、長さ十六里半の此の大きな砂濱は、人の子の生活の戦場で、同時に其の遊び場であります。風雨の中の舟引揚げ、一時を争ふ漁舟の乗出し、地曳の網のあがりぎは、男は赤裸、女は眞顔で曳々聲を出す時は、自然を相手の戦争といふ感がひし〜と人を壓します。併し風雨が過ぎて二三日、右に大東、左に飯岡の岬も歴々<sup>あか</sup>と見えて、空青々と、日麗らかに、心地好い程の南風がそよ吹いて、萬里一碧の海的笑顔に愛嬌ばかりの白波を立つる日は、向ふの方でながらみ貝を搔く男も、赤裸で、子供の風呂桶ほどもある飯櫃引寄せ、立ちながら茶漬を食うてゐる赤銅作の仁王様も、一張羅の

砂ぶく

砂のぶく〜とつもつてゐるところ

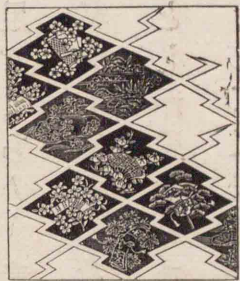
賽の河原

冥途で子供の亡者が石を拾つて塔を積むといふところ

晴着を汗にすまいとして、それを風呂敷に包んで負<sup>お</sup>つて、紅い襦袢一つになつて波打際を行く田舎娘も、街道の砂ぶくに引換へてしつとりと弾力ある波打際の砂路を荷馬車挽かして行く向鉢巻の男も、自轉車の小僧も、砂の上に坐つて日がな一日のんきに網を繕うてゐる爺さんも、その子のおもちやに小蟹をとると懸命に両手で穴を掘つてゐるかみさんも、人形のやうな両手を舉げて家鴨の蹠のやうな兩足でよち〜走つて来る三歳<sup>みっ</sup>の女兒も、それらを見てゐる私共も、鬼がゐない賽の河原の砂遊をしてゐる一様の子供としか思はれません。まことに人生は嚴肅であります。そして又快活であります。



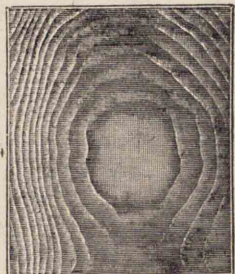
Canvas  
畫布  
カンヴァス



松皮模



朽木形



玉目形

此の砂濱は又大きなカンヴァスであります。色々のものが色々のものを描きます。風が掃ひ、雨が流し、波が洗ふに任せてある此のカンヴァスの上に、勿論不朽とか無窮とかは許されません。しかし刹那のものにも人間の不朽よめてたい波の手の跡を御覽なさい。波は生きてゐます。活きた波の手の跡に、波の氣分が顯れてゐないのはただの一筆だつてありません。彼は好

んで砂をしじらに織ります。松皮模様を描きます。鰐皮を作ります。朽木形。鉤をかけた玉目形。頗る意氣な綾や縞も彼の手です。人の足跡。子供の足跡。轍の跡。馬の足跡。大きな梅花模様は犬が行くくく描いたのです。不具な楓の三本趾、鳥にしては大勝なのは鳥に違ひない。ひよい、ひよい、ひよいとやゝしばらく續いて、何かに驚いてばつと飛立つたげであります。小さなくく模様の、小刻みに右につゞいて左に折れ、また翻つてもとへ戻つて居るのは、千鳥か何ぞの心の曲折を語つてゐます。蟹の足跡があります。貝のあるいた跡があります。ある時、小さなくく刷毛でばつくと描いたやうな織いくく半月形を、これは



龍の鬚  
誰に似た草  
人家の軒下など  
にうゑる

粕谷

東京府武蔵國北  
多摩郡千歳村の  
大字

東京市の西十三  
軒位

作者の居住地

伊香保

群馬縣上野國群  
馬郡伊香保町

作者は九十九里  
濱へ行く前に伊

香保に遊んだ

甘藍

Cabbage

何だらう、一體何が描いたのだらうと、よく見て居ると、龍の鬚に似た小さな草が、そ知らぬ顔して、「私ちやありません。」と織い首を掉つてゐました。

九十九里に往つた最初は、七月といつてもしけがちで、此の大きな海を前に控へながら、毎日豆腐や、粕谷から持參の甘藍、豌豆、伊香保の干蕨の類ばかり食うてゐる日が續きました。その内二週間も経つと、七月も半ばになつて、鱈の地曳網が始りました。私共が歸る頃には鱈も大きく、味も大分よくなつてゐました。朝暗い中から拍子木が鳴ります。地曳の始る知らせです。私が浴衣一枚で海水浴に行く頃は、大抵もう曳き始めてゐました。よく風いだ朝などは、地

曳の組が、幾組もくく南に北に並んでゐます。霧の中に小さく見ゆる組、もう眼に入らぬほど遙かな杳かな組もあります。なるほど九十九里は大きな濱です。腰と踵に力を入れて、急がず休まず、永劫につゞくかのやうにじわくく曳くのも、見てゐて力が入るものですが、網の目標の浮樽が見えて來てからの活氣は、また見物であります。約十町も離れて曳いてゐた南北二列の曳子が、追々近寄つて來たかと思ふと、一方の列が綱を抱へながら、えつさえつさと他の一列の方へ走せ寄ります。鉢卷の赤裸男がざんぶと海に飛込んで、綱元へ廻ります。棒手振が寄つて來ます。やつさ籠が幾箇もくく並べられます。波打際では、其



方曳け、此方しほれと、網主が罵りわめいてみます。私共も砂の上から立ちあがつて、そろ／＼波打際へ向ひます。もう網は盡きて、繩網が見えて來ました。向鉢巻、腰膚脱いだい、加減な婆さん、かみさん、娘までが、ざぶ／＼海に飛びこんでいつて、件の繩網を攫んで、一抑一揚、歌で拍子を取りながら引張ります。名物の地曳歌がこれです。中でも年配の女が金切聲で音頭を取ります。皆がつゝいて囃します。彼一句、此一句、歌つては曳き、曳いては歌ふ。抑へて、揚げて、俛かんで、伸びて、右の片足ひよいと上げて、拍子も面白く、網は段々あがつて來る。一様な節の間々に、何とか何とか、やあい。」と一齊に囃すときの面白さ。

もう網が見えて來ました。網の繼目を全速で解く。海に潜つて網の囊をしぼる。眞裸の網主が咽喉も裂けよとわめく。一切の男女はぐるりと網に取りつき、何とか何する、何とか何せい、何とか何とかやあ。をやはり歌ひつゝけながら、網を手繰つては勿ね、しほつては勿ね、段々囊の



網曳地の濱里九十九



底へ魚を寄せて行きます。

子供が攔網たまを持つてたかりま

す。もう網の中は、さつきか

ら鰹や鯖の青光り、白光りが

ばたく、ばたく、ごつたか

へしてゐます。鰹の千五六

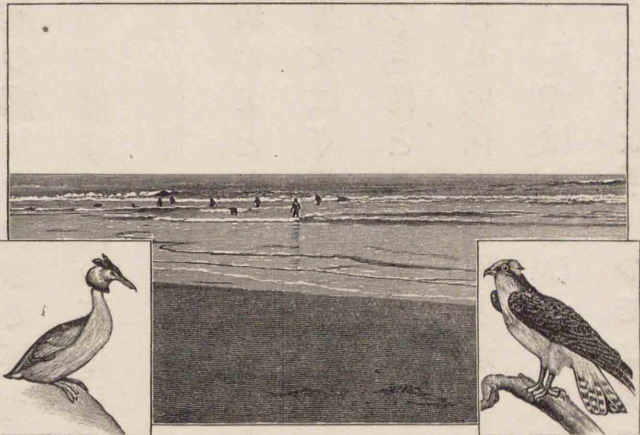
百は入るやつさ籠が持つて

來られて、一杯になると、向鉢

巻、雙肌脱ぎの女たちが二人

で籠の縁を攫んで、「やつさ、や

つさ」で濱へ持つて行きます。



かいつぶり

みさき

どうと置くこともあり、ぶつくりかへすこともあります。

いやもう盛なことです。

地曳通ひは私共の日課でした。私はかく自ら嘲りました。

地曳すればわれも鷗と飛んで來つ

魚獲んとして去りがてにする

拍子木が鳴ると、いそぐ飛んで濱に行き、獲物を手に入る

るまではうろついて立ち去らぬ私は、魚欲しさに地曳網の

上を往つたり來たりするあの鷗や、みさごや、かいつぶりさ

んたちに似寄つたものでした。(新春)

一五 金の鉤かぎ

渡り鳥

北原白秋

北原白秋  
名は隆吉  
詩人  
歌人  
明治十八年福岡  
縣生



乗鞍嶽  
信濃飛騨兩國の  
境に峙つ高山

あの影は渡り鳥、  
あの耀きは雪。  
遠ければ遠いほど空は青うて、  
高ければ高いほど脈立つ山よ。  
あゝ乗鞍嶽、  
あの影は渡り鳥。(詩集水墨集)

新月

斷崖の松の木に  
月ほそくかゝりたり。  
ほそき月、

金無垢の月。

入海の波間にも  
また月はしづきゆく。  
沈々と

金の鉤。

金無垢のするどさよ、  
絹漉の雨ののち、  
しんじつに  
走りいづるその蒼さ。



島黒く、海黒き

眞の闇

舟一つすゝみゆく、

その上にほそき月。

なにかわかぬ、

魚族は目をさまし、

鈴蟲は一心に鳴きしきる、

虔つゝしみのきはまり。

闇の夜は斷崖も、松の木も

かげわかず、ゆく舟も見えわかず。

たゞ光るほそき月、

金無垢のほそき月。(畑の祭)

一六 名將の文事

芳賀 矢一

應仁の大亂以後、北は陸奥より南は筑紫のはてまで、世は刈薦の亂れくゞて、何時治るべしとも見えず。文藝の花は地に委して、大方顧みるものもなかりしが、身は武門に生まれながら、やさしくもその花の種を拾ひて、これをおのが城郭に培ひける人あり。細川幽齋、太田道灌の如きは、即ちこれ

芳賀矢一

國學者

文學博士

東京帝國大學名譽教授

國學院大學長

越前國福井生

昭和二年薨

年六十一

細川幽齋

名は藤孝

慶長十五年(三

〇)薨

年七十七

太田道灌

名は持資

文明十八年(二

〇)卒

年五十五



なり。



細川幽齋  
京都南禪寺天授庵藏

細川幽齋は足利の長臣たる細川の名門に生れ、兵馬倥傯の世、禮文の閑事を修むる暇なく、十四歳の初陣よりこのかた、劍戟吶喊の中にのみ馳驅したりき。或日の戦に手痛く、敵將を追ひつめたるに、敵早くも馬を棄てて逃れ隠る。幽齋もはや尋ねんに詮なし、引きかへさんといふを、從卒、暫し待たせ候へ。とて、件の馬をあらため、敵未だ遠からず、早く追つかけ給ふべし。といひつ

つ、主の轡を執りて、息をもつがず、駈出で、やがて彼の敵を見つけて取らせたり。

幽齋、從卒にむかひ、「何を以て敵の遠からざるを知りしぞ」と問ふ。從卒答へて、「古歌に、

君はまだ遠くはゆかじ我が袖の

たもとの涙乾きはてねば

と詠めり。曩に馬の鞍なほ温かなりしかば、右の歌に思ひよせて、その遠からざるを知りぬ。といふ。幽齋聞きて、「さてさて今の世に無用と嘲りし和歌の道にも、さやうの徳はありけるよ。とて、これより師に就きて、武事の暇にひたすら和歌を學びしが、天資ありたればにや、やがてその奥義を究め、



なほ舊典・故實の學までも拾ひ收めて、後の世を益するに至りぬ。

太田道灌が斯道に志しし機縁、またこれに相似たり。道灌は初め左衛門大夫持資とて、關東の管領上杉が臣にて、幼時より膽大穎悟、物に驕り人に屈せず、武道の業をのみ好みけり。或年の春も暮れんとせしころ、鷹狩に出で、雨に逢ひて民家に入り、蓑を借らんといふに、主の少



太田道灌  
東京市役所内銅像

上杉  
扇谷家六代の主  
上杉定正

七重八重  
中務卿兼明親王  
の御歌  
後拾遺集に見え  
てゐる

將軍義政  
義教の子  
足利第八代の將  
軍  
延徳二年(三五〇)  
薨  
年四十八  
後土御門天皇  
第百三代  
在位三十六年  
明應九年(三三〇)  
崩御  
壽五十九

女、何とも應へずして、山吹の花一枝をさし出す。持資心得ず、怒を含みてそのまゝ立歸りしが、或人の「それは、

七重八重花は咲けども山吹の

みの一つだになきぞ悲しき

といふ古歌の心なるべし」といふを聞きて、持資始めて風流の趣味あるを解し、それより和歌・文學に志を寄せたり。その後江戸城を築きて別に文庫を營み、史傳和歌撰集・記録・醫方・兵書數千卷を藏め、暇あれば翫讀したりといふ。

嘗て京に在り、將軍義政に見ゆ。後土御門天皇勅して武藏野の様を問はせ給ふ。持資歌を以て對へ奉る。

露おかぬ方もありけり夕立の



隅田川  
武藏國荒川の下流  
東京市を貫いて海に入る

空よりひろき武藏野の原

と。又隅田川の都鳥を問はせ給ふに、

年ふれどわがまだ知らぬ都鳥

隅田川原に宿はあれども

「さらば汝が館の風景は」とありければ、

我が庵は松原つゞき海近く

富士の高嶺を軒端にぞ見る

と答へ申ししかば、叡感淺からず、次の御製を下し賜ふ。

武藏野は刈萱のみと思ひしに

かゝる詞の花もさきけり

後、入道して道灌と號し、五十五歳にして卒しぬ。

三上參次

歴史家  
文學博士  
臨時帝室編修局  
編修官長  
東京帝國大學名譽教授  
慶應元年(三三三)  
播磨國生  
眞書太閤記  
三百六十卷  
作者未詳  
繪本太閤記  
八十四卷  
作者未詳  
三國志  
通俗三國志の略  
七十五卷  
三國志を演義したもの  
蜀魏吳爭霸の始末を敘してある  
漢楚軍談  
通俗漢楚軍談の略  
十五卷  
夢梅軒草峯著  
漢の劉邦と楚の項羽との争覇を記述したもの

一七 豊臣太閤

三上參次

從來豊臣太閤の人物事業を世間に紹介したりしは、眞書太閤記・繪本太閤記等の書にして、三國志・漢楚軍談などと共に普く上下貴賤の間に愛讀せられしのみならず、また講談師の種本ともなりて、文字なき社會にもよく知られたり。然るに、惜しいかな、此等の書には武邊の偉人としての太閤は稍、描き出されたれども、其の他の側面は殆ど全く忘却せられたる如く、間、又いみじき誤謬をさへ傳へたり。太閤が無學文盲の人なりと傳へられたるが如き、其の最も著しき例證なるべし。



鑽れば愈々堅し  
類淵謂然嘆曰、  
仰之彌高、鑽之  
彌堅。瞻之在  
前、忽焉在  
後。(論語、子罕)



豐高 臣野 山運 華寶 秀院 吉藏

磨けば益、光り、鑽れば彌堅し。眞に偉大なる人物は、子細に研究するに従ひて一層其の光彩を放つものなり。予は今太閤が一面にては雄才大略の人なりしと同時に、一面には決して無學文盲にあらざりしを斷言し得るを喜ぶ。抑太閤は一代の事蹟頗る多く、事業の規模甚だ大なり。故に舊大名たりし華族の諸家、古社寺、舊家等に太閤の文書の傳へらるゝもの、其の幾許なるを知らず。公の祐筆た

太田和泉守

尾張の人

羽柴秀吉に仕へ

た

大村法橋

播磨の人

柴田勝家及び秀

吉に仕へた

大政所

攝政關白の母の

稱

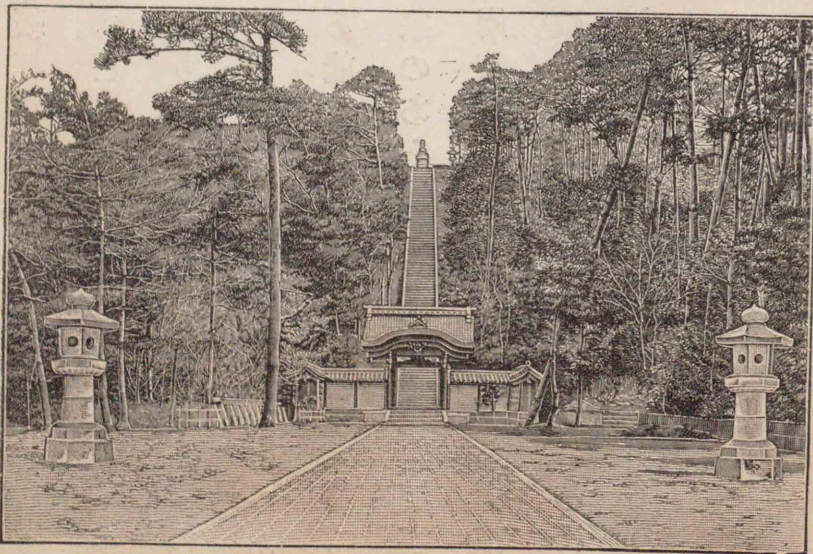
淺野氏

杉原某の二女

淺野長勝の養女

北政所

りし太田和泉守牛一、大村法橋由己等の文章家の手に成りたると思しき、雄健にして生氣に富める文書其の大部分を占めたりとはいへ、確かに太閤の自筆なる色紙短冊、消息の類も亦少しとせず。西に東に遠征せる先より、母なる大政所、夫人なる淺野氏、側



京 都 阿 彌 陀 峯 豐 公 廟



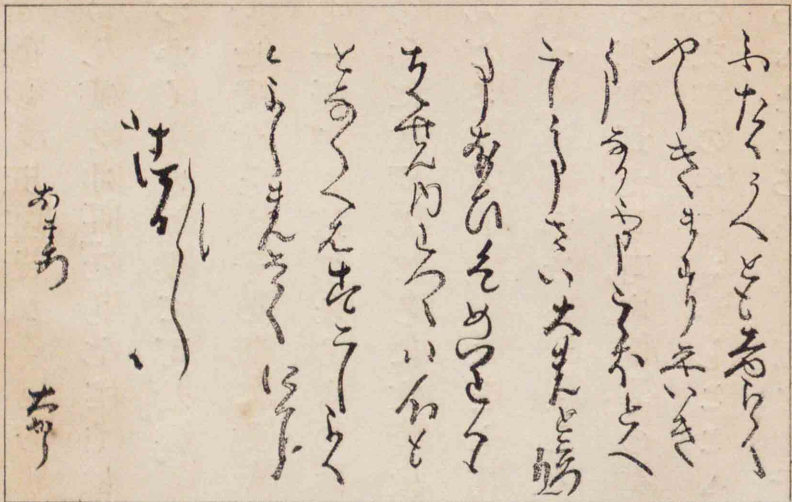
淺井氏  
淺井長政の長女  
茶々  
淀君

江村專齋  
名は宗貞  
儒醫  
寛文四年(三三)  
歿  
年百二十  
醍醐  
京都市伏見區醍醐寺の所在地

室なる淺井氏若しくは秀頼等に贈りたる書狀の如きは、親子夫婦の間柄の事なれば、もとより祐筆に託すべくもあらず、皆自ら筆を執りたりしなり。書狀に用ひたる文字は大抵平假名にして、書體及び筆力に清婉秀潤等の讚美の辭を加ふることこそ敢へてする能はざれ、頗る圓熟したるものにて、その中自ら峻拔の氣象のあらはるゝを見る。漢字もまた用ひられたるが、其の崩し方も無下に卑しからず、嘗て習字せしことの無き人には、決して能くし得るところに非ざるなり。江村專齋の「老人雜話」に、太閤の祐筆が醍醐の醍の字を忘れて、とみには思ひ出でざりしを、大の字を書けよといひし談を記せるは、太閤の簡易を喜び、敏捷を尙びしを

筆蹟

参たく候へとも  
しゆらくやしき  
まわりゑいき候  
事なり不申候  
ほとへこし候  
事さい大まんと  
ころ候はん事お  
もひ候てめいわ  
く候ちくせん内  
わつらい心もと  
なく候へはすこ  
しよく候よしま  
んそくに候  
かしく  
十四日  
おまあ 大から



豊 臣 秀 吉 筆 蹟

いへるにて、少しも漢字を知らざりしをいへるには非ず。軍陣にての消息などは、咄嗟に文章を成したるにて、字句の洗煉なしといへども、天真爛漫、辭簡にして意達し、少しも凝滞する所なし。而して、その間に溢るるばかりの愛情あらはれ、趣味の津々たるものある



小田原在陣  
後陽成天皇の天  
正十八年(二三〇)  
八月秀吉は自ら  
北條氏政を小田  
原城に攻めた

を覺ゆ。天正十八年小田原在陣のをり、母なる大政所に上りし書の中に、「そもじさまは御ゆさん候て、きをもなぐさみ、わか御なり候て可給候。たのみ申候。」の語あり。千言萬語を費すとも、子の親に對する愛情は此の「若くなり給はれ。」の一語より適切なるものはあらじ。又その夫人淺野氏への書には「ねんごろに文給はり、御けんさんのこゝちしてねんごろにみり。」ことし内にはひまあけ可參候。心安く候べく候。かならずとし内に參り候て御目にかゝり、つもの御物がたり可申候。等の句あるなり。祐筆の手に成りたる文書の中にも、かしここゝに太閤の口授に係れりと思はるゝところあり。固より千軍萬馬の血腥き中に成長した



藏熊楠屋土

見花の醒



撥亂反正  
撥亂世一反ニ諸  
正、莫レ近キ於春  
秋一（公羊傳）

天正十四年  
正親町天皇の御  
代（三四〇）

る人の習なれば、太閤も多少殺伐粗暴の氣風ありしを免れず。然り、撥亂反正の功を奏するには、多少かゝる氣風の必要もありしなるべし。しかも古文書の上より觀察するときは、太閤は亦母に孝にして、妻子に愛あり、將卒に對しては最も慈悲の念に富みたる善良なる紳士なりしを見る。さて太閤の歌は如何に。天正十四年春二月二十八日、太閤禁中に伺候しけるに、九重の櫻花今を盛と咲亂れたるを愛でて、其の下に徘徊せり。正親町天皇遙かにこれをみそなはしてにや、畏くも勅使を遣はし、花の折枝に一首の御製を添へて下し賜ひしかば、太閤感佩に堪へず、即ち忍びつゝ霞とともにながめしも



龍安寺

山號は大雲山  
臨濟宗の名刹  
京都市右京區  
仁和寺の東北

あらはれけりな花の木のもと  
と返歌を上られき。又十六年の事なりけり、北山に狩して  
龍安寺に憩へることありき。頃しも春の最中なりけるに、  
庭前の枝垂櫻未だ綻びず、却て淡雪のちらく〜と降來りし  
かば、太閤おもしろく思ひて、  
時ならぬさくらの枝にふる雪は

花をおそしとさそひ來ぬらん

と詠まれき。感興想ふべし。文祿三年諸大名を率ゐて吉  
野の花見を催されし時、關屋の花の下にては、

吉野山たれとむるとはなけれども  
今宵も花のかけにやどらん

文祿三年

後陽成天皇の御  
代(二三四)

關屋の花

吉野の山口の六  
田から吉野の總  
門までの花

藏王堂

今の金峯神社  
吉野山中金峯山  
下にある  
本尊は金剛藏王  
権現

と詠じ、藏王堂にては、

歸らじとおもふ家路を入相の

かねこそ花の恨なりけれ

と歌はれたり。巧を弄ばずしてなか〜に雅趣に富み、格  
調も亦平凡ならずして、古の撰集の中にも置きたき心地せ  
らる。

此の他紀州征伐の時には和歌浦・玉津島にて、小田原陣のを  
りには清見瀉にて、征韓の役には肥前の名護屋などにての  
詠歌も少なからず。天正十六年の聚樂第への行幸のとき  
は勿論醍醐の花に、大佛の月に、その折々の歌多く、時として  
は大宮人の昔を偲ばしめ、又時としては古英雄の横槩賦詩

紀州征伐

天正十三年(三三)  
秀吉が紀伊根  
來寺を攻めた戦  
玉津島

名護屋

佐賀縣東松浦郡  
名護屋村

聚樂第

今の京都市上京  
區中立賣大宮邊  
に出來た太閤の  
新邸

大佛

奈良東大寺大佛  
殿

古英雄

魏の曹操



の面影を想はしむ。

而して功成り名遂げたる此の千古の偉人も、亦無常を感じたる事のありてにや、

露とちり雫ときゆる世の中に

何とのこれる心なるらん

と嘆きしこともありしが、慶長三年八月薨去せらるゝや、あはれにも、

露とおち露と消えにし我が身かな

なにはのことも夢のまた夢

といふ辭世の短冊をとゞめられき。げに太閤は伊達政宗、細川忠興等と同じく、其の頃の武人にして文藻ありしうち

慶長三年

後陽成天皇の御代(三五)

伊達政宗

仙臺藩の祖

寛永十三年(三元)

卒

年七十

細川忠興

幽齋藤孝の長子

關ヶ原役の功に

よつて豊前四十

萬石に封ぜられ

た

正保二年(三〇五)

卒

年八十二

の錚々たる者なりしなり。確かに太閤の自筆と認めらるる消息若しくは短冊にして、予が原本を目撃したるものみにても、二三十はあるならん。加之、太閤は、時には學者をして往事を談せしめて之を聴き、又禪學の書の講義をも聴きたりき。我が國人が誇るに足るべき此の大偉人は、決して無學文盲ならざりしなり。(豊太閤に關する研究)

一八 進 學

室 鳩 巢

諸君の如きは春秋に富み、材力に足る。若し懈らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。然れども歲月は恃むに足らず、材力は多とするに足らず、たゞ孳々汲々とし

室鳩巢

名は直清

江戸幕府の儒者

享保十九年(三元)

卒

年七十七



古詩  
漢代の詩  
作者未詳

陶淵明  
名は潛  
晉の隱逸



巢 鳩 室

て勉めて息まざるにありぬべし。若し悠々として日を涉りなば、年老い齡傾きて後、日頃の懈を思ひ出でていかに悔ゆとも、何の益かあるべき。即ち今余が身の上にて候。されば、古詩にも、

少壯不努力。老大徒傷悲。

といひ、陶淵明も、

盛年不重來。一日難再晨。

及時當勉勵。歲月不待人。

といへば、古人も此の感懷を同じうすとぞ見ゆる。此等の詩句、時々吟詠して勇進の氣を振ひ起すべし。又世に傳ふる朱文公の勸學の文に、

朱文公  
名は熹  
宋の儒者

陶侃  
晉の名將  
淵明の曾祖父

曩祖  
陶侃

勿謂今日不學而有來日。勿謂今年不學而有來年。日月

逝矣。歲不我延。嗚呼老矣。是誰之愆。

言簡にして意も明白なり。折節打誦して自ら警むべし。

それよりも余が常に愛するは陶侃が語なり。

大禹聖人乃惜寸陰。至於衆人當惜分陰。豈可佚遊荒廢

生無益於時。死無聞於後。是自棄也。

といへるこそ、學者志を立つる法とすべきなれ。前にいへる淵明が詩も、曩祖以來の家法にこそと思はる。凡そ人と生まれて、學に志ありといふきは、の生きて時に益なく、死して後に聞ゆることなく、草木と同じく朽ち果てんは、いと口惜しかるべきことなり。されば諸君もこの陶侃が語をも



て自ら激勵して、日夜勤勉せらるべし。

但し、學は勇進を喜ぶといへども、又急迫なるを嫌ふ。とかく一生こゝを離れぬことなれば、急迫にして求むべきにあらず。たとへば懈を戒めて常に聖賢の書に優游涵泳しなば、久しうして自ら進益あるべし。

余昔加賀にありし時、士族の中に紹鷗利休が風流を慕ひて茶湯を好む者あり。江戸に行役する時、道中茶具を持して、逆旅にても釜をかけ、炭をおきて樂みとしけるを、同行の人見て、いかにすけばとて、道中にてはやめよかし。といへば、その人いふは、「道中とて一生の外にあらばこそ。これも一生の日數の内なれば、わが茶湯をする日に非ずといふことな

紹鷗

織田信長の茶道の師武野仲村の號

和泉國堺生

弘治元年(三五)

利休

豐臣太閤の茶道の師千宗易の號

和泉國堺生

紹鷗の門人

天正十九年(三五)

切腹

年七十一

(駿臺雜話)

し。家にあると何ぞ異ならん。とて、その後もやめざりき。

學者の道に志すも、此の人の茶湯を好むが如くなるべし。

一九 鼠

吉村冬彦

鼠の跳梁は段々に猛烈になるばかりであつた。晝間でもちよろ／＼茶の間に顔を出したりした。或日の夕方二階で仕事をしてゐると、不意に階下で烈しい物音や、人々の騒ぐ聲が聞えだした。往つて見ると、玄關の三疊の間へ鼠を二疋追込んで、二人の下女が箒を振廻してゐる處であつた。やつと其の一疋を箒で抑へつけたのを、私が火箸で少し引

吉村冬彦

本名は寺田寅彦

物理學者

理學博士

東京帝國大學教

授

明治十一年高知

縣生



きずり出しておいて、首のあたりをぎゆうと麻絲で縛つた。縛り方が強かつたので、すぐ死んで了つた。もう一つの鼠は何處へ匿れたか、姿を消してしまつた。何も置いてない玄關の事だから、何處にも逃れるやうな穴はない。念の爲に長押の裏を蠟燭で照して、火箸で突つついて歩いたが、やはり其處にもゐなかつた。唯一箇處、壁の隅の方に穴らしいものが見えたが、光がよく届かないので、はつきりしなかつた。それが穴だとしても、それを抜けて何處へ出られるかといふ事が明瞭でなかつた。若しや誰かの袂の中へでも這入つてゐはしないかと思つて調べさせたが、勿論そんな處にはゐなかつた。何だか不可思議な心

持もした。小さな動物に大きな人間が翻弄されたといふ様な氣もした。此處で若し徹底した科學的方法で明白な論理を追跡して行きさへしたら、直ちに此の何でもない謎は解けたであつたらうが、少しは馬鹿々々しくもなつて來たので、此の目前の、明かに物理の法則と矛盾したやうな事實を、假定的な長押の裏の穴で説明してしまつた。尤も科學の方面でさへこれに似たやうな例がないとはいはれない。明るみの矛盾を暗い穴へ押込んで安心してゐる事がないでもない。若しこれが出來なくなつたら、多くの學者は枕を高くして眠られさうもない。此の騒が静まつてやつと十分か二十分たつたと思ふ頃に、



今度は臺所で第二の騒がはじまつた。人間の悲鳴だか動物の吠えるのだから分らないやうな氣味の悪い叫聲が、子供等の騒ぐ聲に交つて聞えて來た。何事かと思つて見ると、年の若い女中が茶の間の眞中に立つて大きな口をあけて奇妙な聲を出しながら、體をいろくによぢつてゐる。それを四方から遠卷に取圍んで、口々に何か言つてゐるのである。

聞いて見ると、背中に鼠がはひつてゐるといふのである。着物の間か、羽織の下か、どの邊かと聞いて見ても、無意味な聲を出すだけで要領を得ない。鼠が動くたびに妙な叫聲を出しては體をゆさぶるばかりである。そつと羽織の裾

を持つて靜かにかゝげて見ると、かはいらしい子鼠が四肢を伸して、丁度貼りつけでもしたやうに羽織の裏にしがみついてゐる。烈しく羽織を一あふりすると、ばたりと疊に落ちた。逃出さうとするのを手早く座蒲團で伏せて、それから後は第一の鼠と同じ方法で始末をつけた。

あとで聞いて見ると、玄關の騒が終つた後に、女中が部屋へ歸つて坐つてゐると、妙に脊筋の處がぼか／＼暖かになつて來たさうである。變だと思つてゐる内に、其處に重みのある或ものが動くのを感じたので、はじめて氣がついて、いきなり茶の間へ飛込んで、奇妙な聲を出し始めたのださうである。



窮鳥 ルハニ  
窮鳥入レ懐仁人

所レ憐。  
(顔氏家訓)

窮鼠

窮鼠噛レ猫。  
(鹽鐵論)

窮鳥は懐に入る事があり、窮鼠は猫を噛む事があるかも知れないが、追はれた鼠が追ふ人の羽織の裏にへばりつくといふ事は、あまりこれまで聞いた事がなかつた。併し後になつて考へて見ると、締切つた三疊の空間から鼠が一疋消え去る道理はなかつた。假定的な長押の穴はそれつきり確めても見ないが、恐らく本當の穴でなかつたらしい。假令穴であつても、其の背面にまで通つてゐない事は、少し考へれば家の構造の上からすぐ分る譯になつてゐた。それで誰かの着物に隠れてゐるといふ事は初めから自明的に分り切つた事であつたのである。それにしても、羽織の裏にしがみついて、人間と背中合せに

ぶら下つた儘で、十分以上も動かさないでゐた鼠の心持が分らない事の一つである。極度の恐怖が一部の神経を痲痺させて、假死の状態になつてゐたのか、それとも本能的の智慧でさうしてゐたのか。恐らく後者と前者とが一つ事柄を意味するのではあるまいか。このやうな騒があつたのちにも、鼠族の悪戯は止まなかつた。恐しい程大きな茶色をした親鼠は、恰も智慧の足りない人間を愚弄するかのやうに、自由な横暴な舉動を擅にしてゐた。(冬彦集)

薄田泣菫  
名は淳介  
詩人  
新聞記者  
明治十年岡山縣  
連島町生

二〇 雷

薄田泣菫



六甲  
兵庫縣武庫郡御影町の北にある山  
もとは武庫山

雷が鳴り出しました。

羊の脊のやうに柔かみのある六甲の谷あひから、大きな雲の塊がむくくと涌上つた。かと思ふと、びかりと電光が光つて、やがてごろくと雷が鳴りはためいて來ました。

「この分ぢや、一雨來るかな。」

二三日焼けつくやうな暑さに苦しめられてゐた私は、籐椅子にもたれながら、西北の空を眺めました。

色々な形をした雲が、氣忙しさうに谷から谷へと飛んで往きました。どれもこれも、鳥の翼と獸の蹄とを二つとも持つてゐるやうに、すばしこく崖を飛んだり、屋根を傳つたりしました。雷はそれを勢づけるやうに一しきり烈しく鳴

西宮  
兵庫縣西宮市  
六甲山の東南十三軒位の海濱

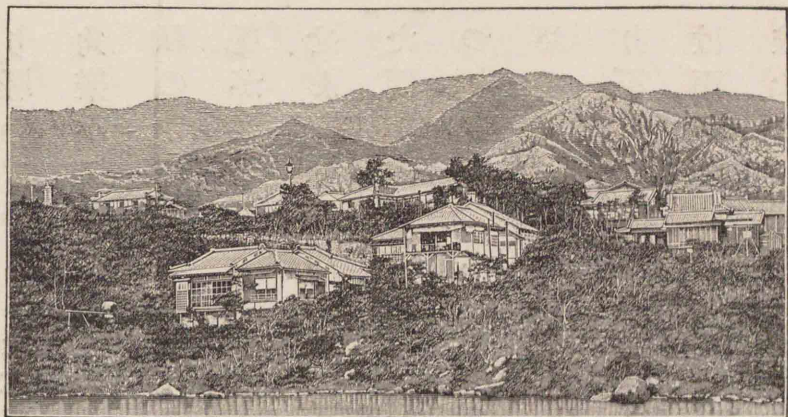
レイン、コート  
Rain-coat

り騒いでゐましたが、いつのまにか尻すぼまりに消えて、折角楽しみにした雨は、どこへか逸れてしまひました。

私の今住んでゐる西宮地方は、一體雨が少ないやうです。夏が來ても、めつたに雷雨などに見舞はれることはありません。私の知つてゐる或人などは、一度雨降りに持つてゐた雨傘を盗まれたので、それが癢にさはつて、それ以來ふつつりと傘を思ひ切つて、雨降りの日にはレイン、コートをはおつただけですませることにしてゐますが、今日まであまり不自由はしないさうです。それほどまでに阪神地方には雨が少ないのです。

またこの邊の労働者は、口癖のやうに、





「住めば都といふが、それにしてもこのあたりの住心地はまた別だな。實際住むなら六甲の下に限るよ。」

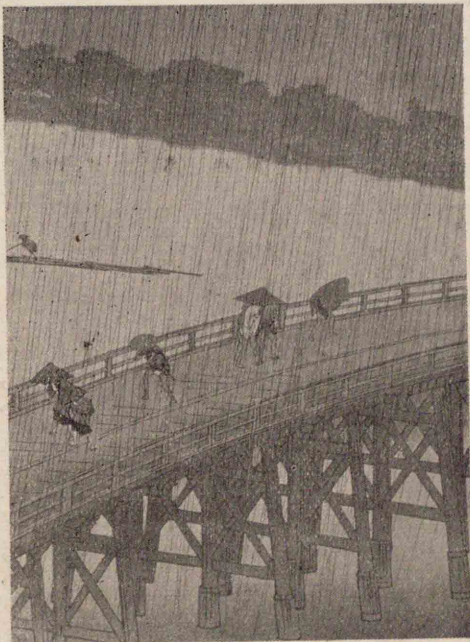
六  
といつて、六甲の山が見えない遠  
甲  
方へ働きに出かけるのを厭ふ風  
山  
があります。それはこの地方が  
比較的よそよりは賃銀が高く、氣  
候がよいのにもよりますが、また  
一つには雨が少ないので、仕事に  
あぶれる心配が少ないのにもよ

ることだと思ひます。

夏になつて、雷一つ聞かれないのも何となく寂しいもので  
す。これに較べると、京都の夏は風が無くて蒸暑くはある  
が、雷が多いので、氣候に變化があつておもしろいと思ひま  
した。京都はあの通りの山に囲まれた土地なので、雷が中  
空に乗り出して鳴りはためくと、反響は反響を生んで、向ふ  
の山でもごろく、こつちの山でもごろく、山といふ山は  
悉く獸のやうに唸り出します。踊り心地のいゝ所作舞臺  
に立つた踊手のやうに、雷は周圍の山々から起る激しい反  
響に釣込まれ興奮させられて、亂舞に亂舞を重ねたはてが、  
あまりに大地を慕ひ、ついたり逆上<sup>ぼ</sup>せて狂亂となり、どうか



すると、危く雲を踏みはづして下界に落ちて來ることがあります。翼を廣げた大きな寺院や、脊のひよろ高い喬木がそこらにざらにある京都では、そんな事があつても、雷は少しも落膽する必要はありません。ごく容易に往き還りが出來ようといふものです。天にあるものと、地にあるものが相搏ち、相慕つて、互に愛憎する激情熱意は、發作的な電光の痛み、大粒

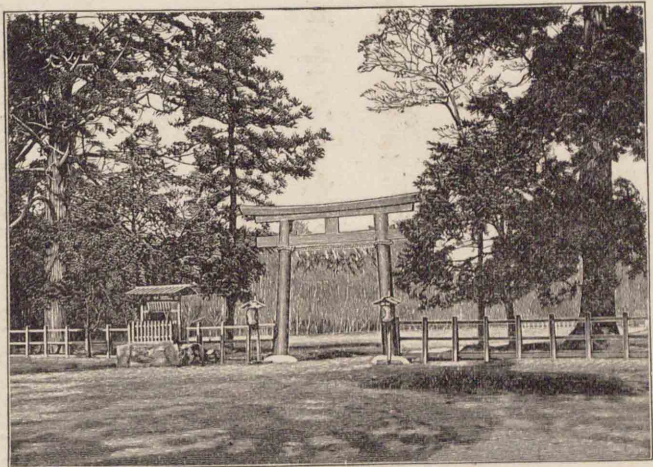


立 夕  
筆重廣藤安

な雨の騒狂を伴つて、とめどもなく盲目的に感情の動搖を見せますが、それにつれて起きる市街のあわたししい變化も見逃すことは出來ません。焼け爛れた太陽の威力に、へとへとになつて干からびてゐた古い家々の屋根も、道路も、ばらばらと落ちて來る雨の雫に、蘇生した魚のやうに呼吸をふきかへします。續けざまに勢こんで落ちて來る大粒な雨は、さつと白く空に光つたかと思ふと、その次の瞬間には、もう壘にぶつつかり、軒でとんぼがへりを打ち、街路樹に跳ね飛ばされて、ころころと道路に轉げ落ちて來ます。そのなかをあわたししく駆けぬけて往く男女の騒々しさ。ふだんはもの靜かに、



ひつそりしてゐて、まるで墓のやうに思はれる古い京都の



賀 茂 別 雷 神 社

街も、かうして雷雨がやつて  
來ると、急に心臓は鼓動し、脈  
搏は動き出して、昔の若さを  
取返します。その襲來が外  
の地方ではめつたに見られ  
ないほど激しく、おまけにそ  
れが度々あるので、京都の夏  
は私の好きなものの一つに  
なつてゐます。

それに、雷雨が通り過ぎたあとの、濡れた大地から、濕つた空

氣から、小鳥のやうに身ぶるひして水をきつて跳ね上る街  
路樹から放散するあの新鮮な雨のにほひは、京都の街で嗅  
ぐと、とりわけそれが味ひがあるやうに思はれます。

私は神々の系統については、何の知識をも持つてゐません  
が、あの京都の賀茂に祭つてある別雷命は、その名の示す通  
り雷神ではあるまいかと思ひます。かういふ神があつた社  
のなかに祭つてあつて、祭といへば何よりも先づ賀茂の祭  
を聯想させられるところに、京都人がどんなに雷のために  
威服させられてゐるかが想像出來ようと思ひます。

(大地讃頌)



霧島

日向大隅に跨る  
火山  
東霧島山は即ち  
高千穂峯  
西霧島山は韓國  
岳  
吉田絃二郎  
本名は源次郎  
文學者  
明治十八年佐賀  
縣生  
榮の尾の湯  
韓國岳の南麓の  
温泉  
鹿兒島縣始良郡  
牧園村にある

二 霧島登山

吉田絃二郎

午後、私たちは韓國岳に登ることにした。霧島第一の嶺である。榮の尾の湯の宿のすぐ後から、道は非常に急であつた。一人の案内者を先達にして、私たちは三抱へも四抱へもある榎だの、えんこうもみぢだの、赤松だのの茂つた處女林を四籽ばかりも歩かなければならなかつた。山は茂つてゐたが、明るかつた。何といふ小鳥であらう、梢から梢の間を囀りながら飛んでゐた。葉の光の餘りの美しさに恍惚として、私たちは屢立ちどまつた。そこでは路傍の一莖の羊齒の葉すら、捨てがたい輝と香とをもつてゐた。かけ

霧島山  
左は高千穂峯  
右は韓國岳



霧島山

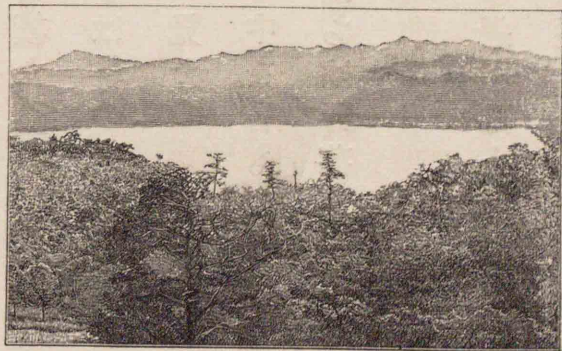
すや鶯の聲が、谿川の音につれて絶えず響いてくるのであつた。巨軀を横たへた倒木を越える毎に、私たちは幹の冷たい苔に手や頬を觸れて見た。霧は樺の林の中を音もなく走つて行つた。私たちは野苺を抓んでは食つた。處女林を通り過ぎると、境は急に開けて、そこには柔かな草の葉が八月の日の光を曠野いつばいに匂はせてゐた。躑躅や空木の間から、草の光をすべるかのやうに、鶯の聲が



大浪の池  
韓國岳の中腹に  
湛へてゐる池

流れて來た。

「大浪の池が見えます。」と案内の男が叫んだ。韓國岳を背景として、千年の處女林に包まれた大噴火口は、海拔千五百米の雲と霧とを凝集せしめて深碧の大浪を湛へてゐるのであつた。周圍八軒の絶壁に覆ひかぶさつてゐる森林に抱かれた山頂の池は、千仞の崖下に萬古の清泉を撫しつゝ、晝は紺碧の空を宿し、岫を出づる白雲を泛べ、夜は銀河の影を沈め、月光を祕るのであつた。



大 浪 の 池

何といふ秀麗、何といふ靜寂。韓國の青い岫を出でたる白雲は、大浪の池に銀影を投げては、柔かな高原の草を舐めて谿に落ちて行く。

韓國の影と空の影とが相交はるところに、一脈の銀線が池中を二分して、波は池の半面にかすかな囁きを立てた。私は未だ曾てこのやうに鮮かな、美しい山上の池を見たことがない。人間が近づいていくには餘りに聖い池である。それは天空と星と白雲の影とのみを宿すために神の造られた池ではあるまいか。

私たちは崖を下りて池の岸に立つた。案内者について來た五郎といふ犬が眞先に池の中に飛込んだ。彼は私たち



が池のふちにゐた間、殆ど一時間餘りも水中に突きでた岩の上にしやがんだまゝ、身じろきもしなかつた。私は池の靈氣に打たれた五郎を興味深く見つめた。池の面をかすめて、郭公が鳴きながら飛んで行つた。やがて一籽も隔つてゐるであらう向ふ岸から、絶壁の古林にこだましつゝ響いて来る笛の音の如き哀切な韻を聴いた。河鹿の聲である。莊重といはうか、森嚴といはうか。尊い人間の技を絶したる大自然の交響樂である。私は餘りの感激に、草の中に踊り上つた。私たちは岩に腹這ひになつて池の水を飲んだ。聖泉とはこんな泉をいふのであらう。

山も池の面も雲に包まれてしまつた。私たちは薄暮の山道を下つた。(霧島紀行)

相馬御風

名は昌治

文學者

明治十六年新潟

縣糸魚川町生

### 三 烏賊釣舟

相馬御風

秋の氣が動きはじめる頃から、海も亦著しくその趣を變へて来る。

夜の浪の地をうつ音のまくらべに

ひゞくにも知る秋の來たるを

八月の下旬になると、不思議にも、浪の音に秋らしい感じがそはつて来る。水の色が紺碧が、日にくく黒みを増して行く。波のうねりが、妙にせゝこましく、荒々しくなり、磯に打



ちつける工合も、何となくいつこくになる。漁師たちは、さういふ波の打ちかたを見て、「あゝ、もう秋の波が立つて来た。」といふ。

漁船の遭難の最も多いのも、その頃からである。暴風浪に遭つて漁船の難破した悲惨な光景や、それにまつはる悲しい話を、私たちは、過去に於て、どれほど多く見たり聞いたりしたかわからない。私たちの地方で、初秋の暴風浪の難に遭ふのは、烏賊釣舟である。烏賊釣舟の出るのは、おもに六月から九月までの間で、しかも、それは夜間に於てである。眞夏の夜の風いだ海に、點々たる漁火が水平線を取りまいてゐるのを、涼しい風の吹く海岸で眺めるのは、まことに美

しい。能登の山に沈んだ夕日の餘光に、見渡すかぎり金色に輝いてゐる海面を、涼しい夕風を帆に受けながら、滑るやうに沖へくと出て行く烏賊釣舟の群を眺めるのも、たまらなく快い。けれども、いよく秋の波が立ちはじめ、いつ思ひがけない大荒れが来るかわからないやうな夕暮に乗り出して行く烏賊釣舟の、何となく寂しさうな姿や、その舟の小さくなるまで、波際に立つて見送つてゐる漁師たちの妻や子供の不安さうな様子を見るのは、いひやうもなく哀れなものである。

暗いさびしい

夜の沖



烏賊釣舟の

灯が見える。

どれがおうちの

舟だらう。

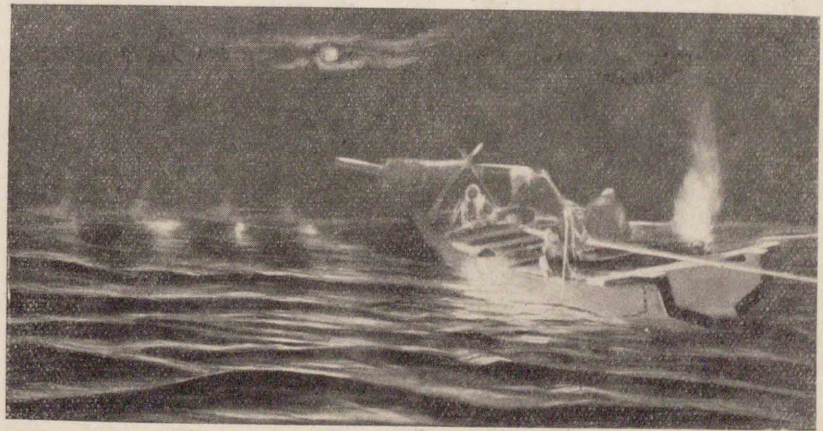
幾つも幾つも

灯が見える。

うちの父さん、

眞夏でも

沖は寒いと



舟 釣 賊 烏

いつてみた。

時々波に

かくれては、

ちら／＼舟の

灯が見える。

漁師の子供たちのかういふ心持を察して見たりして、私たちも、時々夜の沖に波のまに／＼明滅する漁火を眺めて、妙に涙ぐましくなることがある。

沖邊なる烏賊釣舟のいさり火を

夜ごとにわれの数へては見る



よもすがら働く身にはしのゝめの

光いかばかり嬉しからまし

夜中沖で働いた疲にもまけずに、元氣よく艀を押しながら、まだ日の出ない曙の海を漕歸つて來る漁師たちの心もち、は、どんなにすがすがしいことであらう。

秋の波のやゝたちそめし沖邊より

烏賊釣舟はけさもかへり來

まつたく「けさもかへり來」である。「あゝ、今朝も無事に歸つて來てくれた。」かういふ安心は、恐らく、秋風が吹きはじめの頃から、毎朝漁師の妻たちの感じないではゐられぬところであらう。此の「今朝も」今朝もの安心にひかれて、彼の女

たちはどんな危険が隠されてゐるかわからぬ夜の海へ、夫の乗る舟を、毎夜送り出してゐるのである。(愚庵和尚その他)

### 二三 東郷元帥の印象

和田英作

和田英作  
洋畫家  
東京美術學校教授  
帝國美術院會員  
明治七年鹿兒島生

水交社  
當時は東京市京橋區築地にあつた  
今は芝公園内にある  
海軍將校の社交俱樂部

眼と鼻と口とがくつつついてゐる顔を漫然と畫くのではない。況や洋服や着物を畫くのではない。畫家が彩管を握つて人の肖像を畫く時、畫家はカンヴァスの上に、畫かんとする人の魂を躍動させ、その全人格を畫面に表現しようとする。——私が東郷元帥の肖像畫を畫いたのは、もう十年も昔のことだ。だが、年と共に薄れゆく筈の印象と感激とは、今なほはつきり私の腦裡に刻み込まれてゐる。水交社



大震災  
大正十二年の關  
東大震災

の一室に掲げられてゐた思出の元帥の肖像は、大震災に焼かれて、今は形ともなくなつてしまつたが、私の魂に焼きつけられてゐる元帥の強い印象と面影とは、私の生くるかぎり、決して消えはしない。

大正九年の冬の暮近く、私は一箇月餘りも毎日麴町の東郷元帥邸に通ひ續けた。狭い西洋館の質素な應接室、そこが臨時のアトリエであつた。元帥は來客を斷つて、毎朝十時から二時間ばかり、モデルになつてきちんと立たれた。肖像は等身大の立像で、虎の皮の上に海軍大將の正装をつけて直立し、右手に軍帽、左手に元帥刀を握り、向つて左側には懸崖作の白菊がゆかしい香を放つてゐた。金モールの正

アトリエ  
Atelier 畫室  
モデル  
Model

装の上には、肩から大勳位の綬を帯び、その上胸には武勳を語る大きな勳章を十いくつもつけるので、その目方だけでも大變なものだが、元帥は、毎日疲も見せず、快く私の註文に應じられた。元帥に接しての最初の印象は、一言にしていへば、「慈父のやうな感じ」のする人、馴れてくると、何となく引きつけられるやうで、「膝の上に抱かれてみたい」といふやうな氣がした。物靜かで、巧まずして謙遜で、「人生の修行を完成した人」のやうに思はれた。そして、「單なる一個の武人ではない、この大きい有りのまゝの人間、東郷の眞面目を畫かねばならぬぞ。」と思つた。

しかし、元帥が正装を着けて、元帥刀をしつかり握つて、私が



「さあ、これから畫きますよ。」といふと、元帥の表情はがらりと一變する、兩眼は何物をも威壓するやうに鋭く光つて、一點を深く凝視し、口は固く結んで、顔面の筋肉は引緊つて、殆ど微動だもしない。そこには日本武人東郷平八郎元帥が、儼然として立つてゐる、三笠艦上に三軍を叱咤する、海の名將軍が、じつとにらんでゐる。「私の知つてゐる元帥、私の感じてゐる慈父の如き元帥はこんな人ではない。」とは思ふが、私の筆の力は、元帥の溢れるやうな武人としての精神力に、動もすれば壓倒されてしまふ。私は全く、まるで違つた人の肖像を畫いてゐるやうな氣がして困つた。

畫が出来てから水交社の一室に飾られると、平常の元帥と

は感じが違ふ。」といふ評判だつたが、私はその時つくづくと思つた、元帥は恐らく、武人としての東郷、日本海軍の東郷、公人としての東郷の面影を遺すつもりだつたのだらう。だから、カンヴァスの前に立つと、武人東郷の氣力が充ち満ちて、その氣力の中に、自然私の筆も吸込まれたのだらう。

一體元帥は骨の太さうな力の入つた、かつしりした身體だが、柄は餘り大きくない。しかも、顔色は赤みが少なく、髭は殆ど白く、頭髮も白髪に近いといつてもいい位で、やさしい、いゝお爺さんなのだ、あのポーズされた時の態度と恐しい程の氣力とは、今以て私には強い印象となつて残つてゐる。

ポーズされた  
モデルとして  
Pose  
の姿勢を取ら  
れた



ラッロ  
Laszlo De Lombo  
(1869—)ハンガリー  
の人の肖像畫をよ  
くする

私が元帥の肖像を畫いてゐる時、ある日、和田さん、これは參考にならんか。と、ラッロといふ畫家のかいた元帥の肖像の寫眞畫を出された。「濟みませんが、記念に一筆」とおねだりする、と、元帥はいくくといつて、何のこだはりもなく、無雜作に自分で墨をすつて、自分で筆をかんで、贈和田君



東郷平八郎  
ラッロ筆

海軍大將東郷平八郎

しかつた。今、私の應接室にあるのがそれだ。私は勿論元帥の全部を知らない。釣鐘は、撞木が大きけれ

ば大きい程大きな音を出す。元帥の肖像を畫いた私の筆は、餘りに小さくて、元帥の全人格を畫き出せなかつたかも知れぬが、元帥から受けた強い印象と感化とは、いまだに忘れられない。(世界人の横顔)

二四 み民われ

海犬養宿禰岡磨

海犬養宿禰岡磨  
萬葉時代の歌人

み民われいけるしるしありあめつちの

さかゆる時にあへらくおもへば

よみ人しらず

つくばねのこのもかのもにかけはあれど

つくばね  
筑波嶺  
茨城縣常陸國の  
名山



源實朝

鎌倉第三代の將  
軍  
承久元年(二七九)  
薨  
年二十八

佐久良東雄

勤王家  
常陸の人  
櫻田の變に坐し  
て萬延元年(二五三)  
○牢死した  
年五十

八田知紀

歌人  
鹿兒島の人  
明治六年歿  
年七十五

きみがみかげにますかげはなし

源 實 朝

山はさけうみはあせなむ世なりとも

君にふたごころ我あらめやも

佐久良東雄

朝日かけ豊さかのぼる日の本の

やまとの國の春のあけぼの

八田知紀

いくそたびかきにごしてもすみかへる

水やみくにのすがたなるらむ

森鷗外

名は林太郎  
文學者  
醫學者  
文學博士  
醫學博士  
陸軍軍醫總監  
皇室博物館總長  
石見國津和野生  
大正十一年薨  
年六十一  
國分寺  
丹後國加佐郡由  
良町の南四軒中  
山にあつたとい  
ふ  
三門  
寺院の樓門  
山椒大夫  
丹後國加佐郡由  
良町石浦に住ん  
で多くの奴婢を  
唐使してゐた長  
者だといふ  
三郎  
山椒大夫の五子  
のうち三郎が最  
も暴戾であつた

二五 厨子王

森 鷗 外

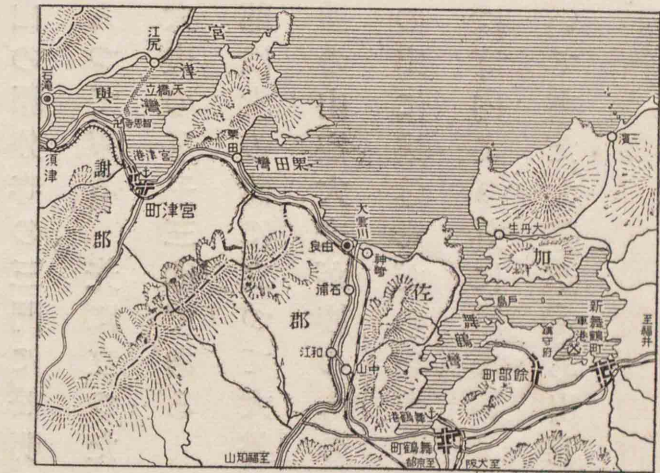
中山の國分寺の三門に、松明の火影が亂れて、大勢の人が籠み入つて来る。先に立つたのは、白柄の薙刀を手挟んだ山椒大夫の息子三郎である。

三郎は堂の前に立つて大聲に言つた。「これへ參つたのは石浦の山椒大夫が族のものぢや。大夫が使ふ奴の一人が此の山に逃込んだのをたしかに認めたものがある。隠れ場は寺内より外にはない。すぐこゝへ出して貰はう。」  
附いて來た大勢が「さあ出して貰はう、出して貰はう」と叫んだ。

本堂の前から門の外まで、廣い石疊が續いてゐる。其の石



疊の上には、今手にく松明を持つた三郎の手のものが押



丹後由良附近

合つてゐる。また石疊の  
両側には、境内に住んでゐ  
るかぎりの僧俗がほとん  
ど一人も残らず簇つてゐ  
る。これは討手の群が門  
外で騒いだ時、内陣からも  
庫裡からも、何事が起つた  
かと怪しんで出て來たの  
である。

初め討手が門外から門をあけいと叫んだ時、あけて入れた

ら亂暴をせられはしまいかと心配して、あけまいとした僧  
侶が多かつた。それを住持曇猛律師があけさせた。併し  
今、三郎が大聲で逃げた奴を出せと言ふのに、本堂は戸を閉  
ぢた儘、暫くの間ひつそりしてゐる。

三郎は足踏をして、同じ事を二三度繰返した。手のもの  
中から和尚さん、どうしたのだ。と呼ぶものがある。それに  
短い笑聲が交る。

やうくの事で本堂の戸が静かにあいた。曇猛律師が自  
分であけたのである。律師は偏衫一つ身に纏つて、なんの  
威儀をも繕はず、常燈明の薄明りを背にして本堂の階の上  
に立つた。丈の高い岩乗な體と眉のまだ黒い廉張つた顔



とが、搖めく火に照し出された。律師はまだ五十歳を越したばかりである。

律師は徐ろに口を開いた。騒がしい討手の者も、律師の姿を見ただけで黙つたので、聲は隅々まで聞えた。

「逃げた下人を捜しに來られたのぢやな。當山では住持のわしに言はずに人は留めぬ。わしが知らぬから、その者は當山にゐぬ。それはそれとして、夜陰に劍戟を執つて、多人數押寄せて參られ、三門をあけいといはれた。さては國に大亂でも起つたか、公の叛逆人でも出來たかと思つて、三門をあけさせた。それになんぢや。御身が家の下人の詮議か。當山は勅願の寺院で、三門には勅額を懸け、七重の塔

東大寺

日本總國分寺  
聖武天皇御建立  
奈良七大寺の一  
華嚴宗の大本山  
本尊は所謂奈良  
の大佛である

には宸翰金字の經文が藏めてある。こゝで狼藉を働かれると、國守は檢校の責を問はれるのぢや。又總本山東大寺に訴へたら、都からどのやうな御沙汰があらうやも知れぬ。そこを好う思つて見て、早う引取られたが好からう。悪い事は言はぬ。お身たちのためぢや。」かういつて、律師はしづかに戸を締めた。

三郎は本堂の戸を睨んで齒咬をした。併し戸を打破つて踏込むだけの勇氣もなかつた。手のものどもは唯風に木の葉のざわつくやうに囁きはしてゐる。

此の時大聲で叫ぶものがあつた。「その逃げたといふのは、十二三の小わつばぢやらう。それならわしが知つてゐる。」



三郎は驚いて聲の主を見た。父の山椒大夫に見まがふやうな親爺で、此の寺の鐘樓守である。親爺は詞を繼いで言った。「そのわつばはな、わしが午頃鐘樓から見てみると、築泥の外を通つて南へ急いだ。かよわいかはりには身が軽い。もう大分の道を行つたぢやろ。」

「それぢや。半日に童の行く道は知れたものぢや。續け。」といつて、三郎は取つて返した。

松明の行列が寺の門を出て、築泥の外を南へ行くのを、鐘樓守は鐘樓から見て、大聲で笑つた。近い木立の中で、やうやう落着いて寝ようとした鴉が二三羽、又驚いて飛立つた。

田邊  
今の京都府加佐郡舞鶴町

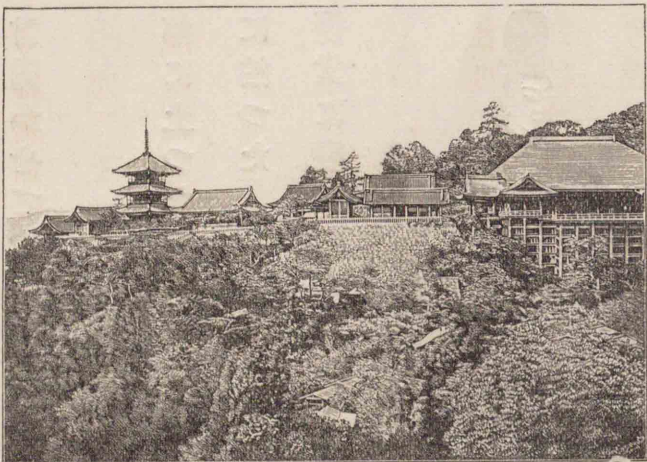
鐵の受糧器

鐵針

錫杖

行脚の僧がもつ杖

朱雀野  
京都市下京區七條千本通の邊  
昔の朱雀大路の名残



中二日置いて、曇猛律師は田邊の方へ向いて寺を出た。鹽

清水寺

ほどある鐵の受糧器を持つて、腕の太さの錫杖を衝いてゐる。跡からは、頭を剃りこくつて、僧衣を着た厨子王が附いてゆく。

二人は眞晝に街道を歩いて、夜は處々の寺に泊つた。やがて山城の朱雀野に来て、律師は權現堂で休んで、厨子王

に別れた。



清水寺  
京都市の東山に  
ある寺  
本尊は観音

「守本尊を大切にしていって往け、父母の消息はきつと知れる。」と  
言聞かせて、律師は踵を旋した。

都に上つた厨子王は、僧形になつてゐるので、東山の清水寺  
に泊つた。

籠堂に寝て、あくる朝目が覺めると、直衣ちきに烏帽子くわぼうしを着て指



烏帽子直衣

貫つらを穿いた老人が枕元に立  
つてゐた。「お前は誰の子ぢ  
や。何か大切な物を持つて  
ゐるなら、どうぞ己おれに見せて  
くれい。己は娘の病氣の平癒を祈るために、ゆうべこゝに

師實

關白太政大臣藤  
原師實  
後三條堀河兩帝  
に仕へた  
康和三年(七六一)  
薨

安樂寺

古筑前國筑紫郡  
宰府町太宰府神  
社の地にあつた  
姉  
名は安壽

參籠した。すると夢にお告があつた。左の格子に寝てゐ  
る童が好い守本尊を持つてゐる。それを借りて拜ませい  
といふ事ぢや。けさ左の格子に来て見れば、お前がゐる。  
どうぞ己おれに身の上を明かして、守本尊を貸してくれい。己  
は關白師實ぢや。」

厨子王はいつた。「わたくしは陸奥掾正氏といふものの子  
でございます。父は十二年前筑紫の安樂寺へ往つたきり  
還らぬさうでございます。母は其の年に生れたわたくし  
と三つになる姉とを連れて、岩代の信夫郡に住むことにな  
りました。そのうちわたくしがだいぶ大きくなつたので、  
姉とわたくしを連れて、父を尋ねに旅立ちました。越後ま



由良で  
安壽は弟厨子王  
を山椒大夫の許  
から逃れ去らし  
めた後入水して  
死んだ

放光地藏  
五穀成就の願を  
旨とする地藏菩  
薩

高見王  
桓武天皇の皇子  
葛原親王の御子  
平氏の祖

で出ますと、恐しい人買に取られて、母は佐渡へ、姉とわたくしは丹後の由良へ賣られました。姉は由良でなくなりました。わたくしの持つてゐる守本尊は此の地藏様でございます。かう言つて守本尊を出して見せた。



放光地藏菩薩

師實は佛像を手に取つて、先づ額に當てるやうにして禮をした。それから面背を打返し、丁寧に見て言つた。「これはかねて聞及んだ尊い放光地藏菩薩の金像ぢや。百濟國から渡つたのを、高見王が持佛にしておいでなされた。これを持ち傳へてをるからは、お前

永保  
白河天皇の御代  
(一七四一—一七四三)

除目  
任官の儀式  
秋の除目は中央  
政府の官吏を春  
の除目は地方官  
の任命をするの  
が常であつた

の家柄に紛れはない。仙洞がまだ御位にをらせられた永保の初に、國守の違格に連坐して筑紫へ左遷された平正氏が嫡子に相違あるまい。若し還俗の望があるなら、追つては受領の御沙汰もあらう。先づ當分は己の家の客にする。己と一緒に館へ來い。」

師實は厨子王に還俗させて、自分で冠を加へた。同時に正氏が謫所へ、赦免狀を持たせて、安否を問ひに使を遣つた。併し此の使が往つた時は、正氏はもう死んでゐた。元服して正道と名のつてゐる厨子王は、身が糞れる程歎いた。其の年の秋の除目に、正道は丹後の國守にせられた。國守



は最初の政として、丹後一國で人の賣買をさしとめた。そこで、山椒大夫も悉くその奴婢を解放して、給料を拂ふことにした。



森 鷗 外

大夫の家では一時それを大きな損失のやうに思つたが、此の時から農作も工匠の業も前に増して盛になつて、一族はいよゝゝ富み榮えた。

國守の恩人曇猛律師は僧都にせられた。

正道は任國のためにこれだけの事をして置いて、特に假寧トキネ

假寧  
官吏に賜ふ休暇

を申し請うて、微行して佐渡へ渡つた。

佐渡の國府こくふは雜太ざいたといふ所にある。正道はそこへ往つて、役人の手で國中を調べて貰つたが、母の行方は容易に知れなかつた。

雜太  
佐渡國雜太郡  
今の佐渡郡雜太  
町  
佐渡島の中部  
國府川のほとり

或日正道は思案に暮れながら、一人旅館を出て市中を歩いた。そのうち、いつか人家の立並んだ處を離れて、畑中の道に掛つた。空は好く晴れて、日があかくと照つてゐる。

正道は心の中に、どうしておかあ様の行方が知れないのだらう、若し役人なんぞに調べさせて、自分が捜し歩かぬのを神佛が憎んで、逢はせて下さらないのではあるまいか。などと思ひながら歩いてゐた。ふと見れば、だいぶ大きな百姓



家がある。家の南側の疎らな生垣の内が土を敲き固めた  
廣場になつてゐて、其の上に一面に蓆が敷いてある。蓆に  
は刈取つた粟の穂が干してある。その真中に襪褌を着た  
女がすわつて、手に長い竿を持つて、雀の來て啄むのを逐つ  
てゐる。女は何やら歌のやうな調子でつぶやく。  
正道はなぜか知らず、此の女に心が牽かれて、立止つて覗い  
た。女の亂れた髪は塵にまみれてゐる。顔を見れば盲で  
ある。正道はひどくあはれに思つた。そのうち女のつぶ  
やいてゐる詞が、次第に耳に慣れて聞分けられて來た。そ  
れと同時に、正道は瘡病のやうに身内が震つて、目には涙が  
涌いて來た。女はかういふ詞を繰返してつぶやいてゐた

のである。

安壽戀しや、ほうやれほ。

厨子王戀しや、ほうやれほ。

鳥も生あるものなれば、

疾うく逃げよ、逐はずとも。

正道はうつとりとなつて、此の詞に聞惚れた。そのうち臟  
腑が煮え返るやうになつて、獣めいた叫が口から出ようと  
するのを、齒を食ひしばつてこらへた。忽ち正道は縛られ  
た繩が解けたやうに垣の内へ駈込んだ。そして足には粟  
の穂を踏散らしつゝ、女の前に俯伏した。右の手に守本尊  
を捧げ持つて、俯伏した時に、それを額に押當ててゐた。女



は雀でない、大きなものが粟をあらしに來たのを知つた。そして、いつもの詞を唱へ罷めて、見えぬ目でじつと前を見た。其の時、干した貝が水にほとびるやうに、兩方の目に潤ひが出た。女は目が開いた。

「厨子王」といふ叫が女の口から出た。二人はぴつたり抱合つた。 (鷗外全集)

二六 氷川清話

勝 海 舟

世に處するには、どんな難事に出會つても臆してはいけぬ。「さあ、何でも來い。おれの體がねぢれるなら、ねぢつて見よ。」といふ料簡で行くがよい。さうすれば、難事が到來すれば

勝海舟  
名は安芳  
政治家  
舊幕臣  
海軍卿  
樞密顧問官  
伯爵  
明治三十二年薨  
年七十七



勝 海 舟

するほど面白みがついて來るものだ。何でも大膽にかゝらなければいかぬ。どうせうか、かうせうかと躊躇するやうになつては、もういかぬ。若し一度で出來なければ、何度でも出來る所までやり通す。とかく世間の人は、事業の成就する前に、根氣が盡きて疲れてしまふから、大事が出來ぬのだ。確乎たる方針を立て、決然たる自信によつて、知己を千載の下に求むる覺悟で進んで行けば、何時しか我が赤心の貫徹する時機が來て、



西郷南洲

名は隆盛

明治維新の元勳

参議

陸軍大將

明治十年戦歿

年五十二

筆蹟

戊辰三月官軍先鋒至品川二十五日を期して侵撃の令ありと同日書を先鋒参謀に送り一見を希ふ余高輪薩摩の邸に到る

これまで敵視してゐた人の中にも、互に肝膽を吐露しあふほどの知己が出来たものだ。區々たる世間の毀譽褒貶を氣にするやうでは到底仕方がない。

そこに行くと、西郷南洲などはどれ程大きかつたか分らぬ。

以辰三月官軍先鋒至品川二十五日を期して侵撃の令ありと同日書を先鋒参謀に送り一見を希ふ余高輪薩摩の邸に到る

勝海亡舟友筆帖蹟

高輪の一談判で自分の意見を容れたばかりでなく、江戸全市鎮撫の大任まで一切自分に任せて、少しも疑はぬ。昨日まで敵味方であつたといふことは何處へか忘れてしまつ

筆蹟

尊翰拜誦仕候陳は唯今田町迄御來駕被成下候段爲御知被下早速罷出候様可仕候間何卒御待居被下度此旨御受迄如三月十四日西郷吉之助安房守様拜復

尊翰拜誦仕候陳は唯今田町迄御來駕被成下候段爲御知被下早速罷出候様可仕候間何卒御待居被下度此旨御受迄如三月十四日西郷吉之助安房守様拜復

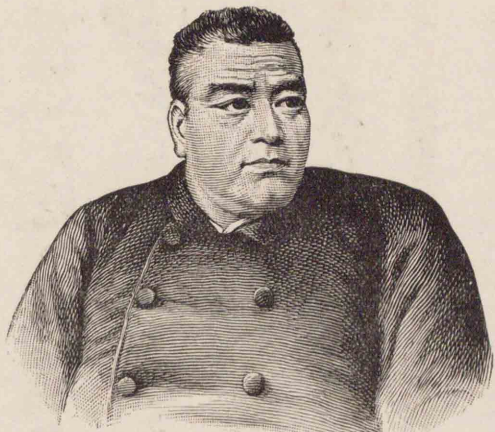
西郷南洲書帖

たやうだ。其の度胸の大きいには、自分もほとく感心した。

官軍が品川まで押寄せて來て、いまにも江戸城へ攻入らうとする際に、西郷は自分が出した唯一本の手紙で、芝田町の薩摩屋敷までその談判にやつて來た。當日、自分は羽織袴で馬に騎つて、従者を一人連れたのみで出掛けた。



まづ一室へ案内されて暫く待つてゐると、西郷は庭の方から、古洋服に薩摩風の下駄をはいて、例の熊次郎といふ忠僕を従へ、平氣な顔で出て來た。「これは遅刻しまして誠に失禮」と挨拶をしながら座敷に通つた。其の様子、すこしも一大事を眼前に控へたものとは思はれなかつた。さて愈、談判



*Saigō Tsugumasa*

西郷南洲  
キヨソネ

りませうが、私は一身にかけて御引受します。」とかういふのだ。西郷のこの一言で、江戸百萬の生靈もその生命と財産とを保つことが出來、徳川氏も亦その社稷を保つことを得たのだ。若しこれが他人であつたら、いや貴様のいふ事は自家撞着だ。」とか、「言行不一致だ。」とか、「澤山の暴徒があゝの通り處々に屯集して居るのに、恭順の實が何處にある。」とか、色々喧しく責立てるに違ない。さうなると、談判は忽ち破裂だ。併し、西郷は流石にそんな野暮は言はない。よく大局を達観する明と、大事に處する斷とをもつてゐた。談判がまだ始らないうちから、桐野などといふ豪傑連は、大勢次の間へ來て、竊かに様子を覗つてゐる。薩摩屋敷の近

桐野  
桐野利秋  
鹿兒島の人  
西南役の勇將  
明治十年城山に  
敗死した



傍には官軍の兵隊がひしくと詰めかけてゐる。實に殺氣陰々として、物凄しい程であつた。然るに西郷は泰然として、あたりの光景は少しも眼に入らぬものの如く、談判を終へてから、自分を門の外まで見送つた。自分が門を出ると、近傍の街々に屯集してゐた兵隊はどつと一時に押寄せ、來たが、自分が西郷に送られて立つてゐるのを見て、一同恭しく捧銃の敬禮を行つた。

此の時、自分が殊に感心したのは、西郷が自分に對して幕府の重臣に接するだけの敬禮を失はず、談判の時にも始終座を正して、手を膝の上に載せ、少しも敗軍の將を遇するといふやうな風が見えなかつたことだ。その度量の大きいこ

とは、いはゆる天空海濶で、見識ぶるなどいふことは、固より少しもなかつた。外國の事情などは自分が話して聞かせた位で、或事柄の知識は自分の方が上であつたかも知れぬが、その氣膽の大きいことに至つては、眞に絶倫と謂ふべく、議論も何もあつたものではなかつた。(永川清話)

## 二七 南洲遺訓

### 西郷南洲

事大小となく正道を踏み、至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ふる時に臨み、作略りやくを用ひて一旦その差支を通せば、後は時宜次第工夫の出来る様に思へども、作略の煩屹度生じ、事必ず敗るゝものぞ。正道を以て



これを行へば、目前には迂遠なる様なれども、さきに行けば

成功は早きものなり。

道は天地自然のものにして、人はこれを行ふものなれば、天を敬するを目的とす。

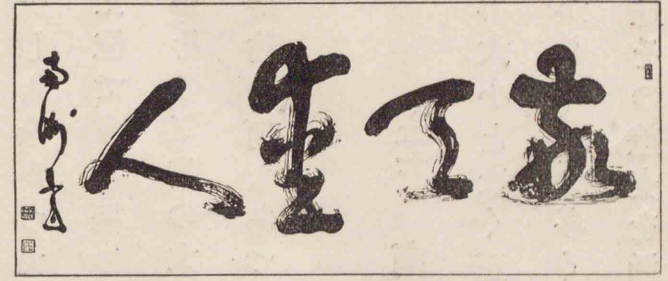
天は人も我も同一に愛し給ふゆゑ、我を愛する心を以て人を愛するなり。

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めず、我が誠

の足らざるを尋ぬべし。

己を愛するは善からぬことの第一なり。修業の出来ぬも、事の成らぬも、過を改むることの出来ぬも、

筆蹟  
敬し天愛し人  
南洲書



西郷南洲筆蹟

功に伐り驕慢の生ずるも、皆自ら愛するがためなれば、決して己を愛せぬものなり。

過を改むるに、自ら過つたとさへ思ひつかば、それにてよし、その事をば棄てて顧みず、直ちに一步踏出すべし。過を悔

しく思ひ、取締はんと心配するは、譬へば茶碗をわり、その破片を集め合せ見るも同じにて、詮もなきことなり。

命もいらす、名もいらす、地位も金もいらぬ人は、始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして國

家の大業は成し得られぬなり。道を行ふ者は、天下舉つて毀るとも足らずとせず、天下舉つ

て譽むとも足れりとせず。自ら信ずること篤きがゆゑな







